

# Avadānakalpalatā 第 59 章研究ノート\*

山崎 一穂

## 1 はじめに

Kṣemendra (西暦 990–1066 年頃) の *Avadānakalpalatā* (Av-klp) は全 108 章からなる仏教美文作品である<sup>1</sup>。全 108 章のうち第 59、69–74 章はアショーク王伝説の叙述にあてられている。このうち

\*本論を著すにあたり、マクマスター大学の Shayne CLARKE 先生から Garbhāvakrāntisūtra に関する書誌情報を御教示をいただいた。同大学大学院の Christopher EMMS 氏とは詩節解釈をめぐって有益な議論を交わすことができた。日本学術振興会海外特別研究員の川村悠人氏、公益財団法人中村元東方研究所専任研究員の友成有紀氏からはパーニニ文法学に関する御教示をいただいた。記し御礼申し上げる。

<sup>1</sup>Av-klp についての近年の研究として LANGENBERG [2015] と ASPLUND [2013] がある。Av-klp の現存する梵文写本は第一章から第 40 章までの章を欠いている。他方チベット文字で音写された Av-klp の梵文原典とチベット訳 (以下、両者を「チベット伝本」と略称する) は第一章から第 108 章までのすべての章を伝えている。うち第 10 章 Garbhāvakrānti 「受胎」については Kṣemendra の真作性が疑われている。LANGENBERG [2015] は同章に焦点をあてその第九詩節の内容分析を行っており、その試み自体は評価に値する。しかし議論の前提となる文献学的問題と原文解釈に今少し注意が払われるべきであった。LANGENBERG [2015: 121–124] は Garbhāvakrānti の真作偽作問題の検討にあてられている。その要旨は次の通りである。Av-klp の奥書で Kṣemendra の息子 Somendra は父親が仏教文献に通暁した Vīryabhadra という学者の助けを借りて Av-klp を書いたと記している。Vīryabhadra は誠実な学者であり、チベットの翻訳官 Rin chen bzang po の同僚だったようだ。したがって『根本説一切有部律雜事』で受胎とナンダの物語が一体化していることに Kṣemendra が気づいていたとしても驚くべきことではない。反論の余地がないと言うにはほど遠いが、ナンダと受胎という主題の組み合わせについて仏教文献に先例があるということは、Garbhāvakrānti を後の時代に挿入された内容的に異質なものではなく、Kṣemendra の仏教説話集成に合った伝統的な題材であったと見る一つの根拠を与える。

Av-klp の梵文写本には、チベット伝本にない Śaddanta 「六牙象」という章がある。LANGENBERG [2015] は第 10 章の真作偽作問題と関連するこの章の真作偽作問題に触れない。Av-klp のケンブリッジ大学所蔵梵文写本 A (BENDALL, add. 1306) の第 198 葉裏面と第 205 葉裏面には次のように記されている。

[198v5] ... hastakāvadānam ūnapañcāśaḥ pallavaḥ || ○ || ... [205v5] ... śaddantāvadānam\* pañcāśaḥ pallavaḥ || ○ ||

... 第 49 章ハスタカ・アヴァダーナ了。... 第 50 章六牙象アヴァダーナ了。

各章末に記された章数は Garbhāvakrānti を含むチベット伝本の章数と一致する。しかし第 213 葉裏面の欄外には「206」という貝葉番号が併記され、次のような記述が見られる。

[213/206v3] daśakarmmaplutyavadānaṃ pañcāśaḥ pallavaḥ || ||

... 第 50 章十業の束縛アヴァダーナ了。

梵文写本 A には第 50 章が二つある訳である。ところが Av-klp の全 108 章の概要が記された奥書にあたる第 387 葉裏面と第 388 葉裏面には次のように記されている。

[387v2] śaśāsa yaś ca śrīguptam | 8 [3] dhanyaṃ jyotiṣkam abhyadhāt | **nandasya sundarīrāgaṃ prayatnena jahāra yaḥ** || ○ **10** || ... [388v1] ... || 47 || hemahastyucitaḥ śrīmān\* hastakākhyo babhūva yaḥ | 48 | **śaddanto dvipo yaś ca** | **49** | daśakarmmaplutiś ca yaḥ | 50 ||

... そして彼はシュリーグプタを教導し、ジョーティシユカ長者に語った。彼はナンダのスンドラーに対する色欲を苦心の末とり除いてやり、... 黄金の象〔を所有する〕にふさわしい吉祥なるハスタカという者になった。そして彼は六牙象となった。そして彼は十業に束縛された者となった。

この奥書に Garbhāvakrānti という章名はない。したがって写本 A の筆写者は Śaddanta 以前の各章末に誤った章数を付していることがわかる。以上の奥書に対応するデルゲ版 Tib. は次の通りである。

[316r6] gang zhig dpal [316v2] sbas la bstan dang | <sup>8</sup> | me skyes skal ldan du gsungs dang | <sup>9</sup> | **mngal nas 'byung ba bstan pa dang** | <sup>10</sup> | gang zhig dga' bo mdzes ma la | chags pa dag ni 'bad pas bsal | <sup>11</sup> ... [317v6]

第 59 章 *Kuṅāla* の和訳は引田 [2006, 2007] によってなされた。筆者はこれを踏まえて同章の和訳を試み、それを山崎 [2011] として発表した。171 詩節からなる第 59 章はアショーカー王伝説を構成する七つの章のうちで最も難解な章であり、山崎 [2011] を脱稿後、筆者は原典と和訳とを再検討する中で新たな解釈が可能な箇所を多数発見した。筆者は初めこれらを付論として発表することを意図していた。しかし再検討した箇所は語義解釈の問題のみならず、詩人 *Kṣemendra* の著作姿勢を知る上でも有益なものであることが判明した。本論文は、山崎 [2011] に発表した原典と訳とを再考しながら、*Kṣemendra* が詩作に対してどのような姿勢をとっていたか、また彼がどのような文学的伝統に依拠して *Av-klp* という作品を著していたかという問題の解明を試みるものである。

| dpal ldan gser gyi glang po can || glang po can zhes gang gyur dag |<sup>49</sup> | **gang zhig gnyis 'thung so drug gyur** || gang zhig las [318r2] | bcu spyad pa dang |<sup>50</sup> . . .

*gang zhig gnyis 'thung so drug gyur* は梵文写本 A の *ṣaddanto dvipo yaś ca* にあたる訳である。したがってこれに後続する *shad* (|) の後に 50 という章番号が付されねばならない。しかしそうすると、チベット伝本は第 10 章に *mNgal nas 'byung ba* (*Garbhāvākṛānti*) を含むから、以降の章の数が一つずつ繰り上がってすべての章の数が 109 になってしまう。チベット伝本の筆写者は奥書を写している段階で、自分の手もとの写本に *ṣaddanta* という章がないにもかかわらず、*gang zhig gnyis 'thung so drug gyur* という同章の概要を記した一文が奥書にあることに気づき、これを後続する *gang zhig las bcu spyad pa dang* (\**daśakarmaplutiś ca yaḥ*) という文に接続させ章の数のつじつまを合わせたのである。先行研究者がこの事実を看過するはずはなく、チベット伝本の第 10 章 *Garbhāvākṛānti* と梵文写本の第 49 章 *ṣaddanta* の真作偽作問題は DE JONG [1977]、STRAUBE [2009: 13–17] によって議論された。両者はともに第 49 章 *ṣaddanta* が梵文写本 A とチベット伝本との現存しない共通の親写本  $\epsilon$  に欠けており、その欠損を補う目的で第 10 章 *Garbhāvākṛānti* がチベット伝本に挿入されたと考えた。しかし前者は梵文写本 A に伝承される第 49 章 *ṣaddanta* は *Kṣemendra* が書いたものではなく、写本筆写者が書いたものと推定した。これに対し後者は梵文写本 A に伝承される第 49 章 *ṣaddanta* は *Kṣemendra* が書いたものであり、筆写者が写本  $\epsilon$  とは別の、第 49 章 *ṣaddanta* を含んでいた *Av-klp* の現存しない写本 [x] をもとに欠落を補ったものと推定した。*ṣaddanta* の本文は第 198 葉裏面最下行から始まり第 205 葉裏面最下行で終わっているから、*Daśakarmapluti* の本文が終わる貝葉に付された二種類の貝葉番号のうち、「206」は *ṣaddanta* の本文が補筆される前の番号、「213」は補筆された後の番号だということがわかる。もし *Garbhāvākṛānti* の真作性を主張するのであれば、以上の議論を踏まえ、第 49 章 *ṣaddanta* の偽作性を証明しなければならない。しかしそれは LANGENBERG [2015] ではなされていない。

原文解釈について逐一論評することは避けるが、問題を一点指摘しておく。*Av-klp* \*10.9cd: *mūḍhaḥ so 'tha prakṛītasacivair indriyair dattasaṃjñāḥ | stanyālāpākṛīparimalasparśanair vetti dhātṛīm ||* に対する LANGENBERG [2015: 127] の訳は次の通りである。“Ignorant, his perceptions provided [only] by [his] natural companions, the senses, he knows the wet nurse by her touch, fragrance, appearance, voice, and by her milk” この訳は構文を正確に理解した上でなされたものとは考えられない。c 句の *atha* という語は時間的前後関係を示しているから、*dattasaṃjñāḥ* という為格所有複合語は *dattasaṃjñāḥ san* という分詞構文と解釈すべきではないか。d 句冒頭の並列複合語 *stanyālāpākṛīparimalasparśanair* はこれに逐語的に対応する英訳語をあてただけでは意味をなさない。問題の詩節は次のように解釈されるべきではないか。“Provided with consciousness by the [five] sense-organs, which are by nature his companions, then, he who is ignorant perceives that she is a wet nurse, with the help of [the tongue that tastes the flavor of] milk, [the ears that catch the sound of her] voice, [the eyes that fall on] the shape [of her breasts], [the nose that detects] the smell [of the milk], and [the body that makes] contact [with her breasts].”

『根本説一切有部律雜事』所収 *Garbhāvākṛāntisūtra* のチベット訳の校訂原典は KRITZER [2014] により詳細な解題と補遺とともに発表された。KRITZER [2014: 5–35] では『根本説一切有部律雜事』所収 *Garbhāvākṛāntisūtra* の内容梗概が示され古典インド医学文献中の胎生学を扱った箇所との内容比較がなされている。この梗概を参照する限り、問題の詩節に対応する箇所は『根本説一切有部律雜事』所収の *Garbhāvākṛāntisūtra* には見られないようである。

ASPLUND [2013] は聖典資料と *Av-klp* 第 66 章、後期アヴァダーナ文献に伝承される *Kavikumāra* 物語の史的展開について考察している。ASPLUND [2013: 287–294, 320–327] は *Av-klp* 所収話の材源の解明、*Av-klp* 所収話と後期アヴァダーナ文献 *Kalpādrumāvadānamālā* の並行話との関係の解明を試みている。その要旨は次の通りである。スコイエン・コレクション所蔵の断片写本 2382/102 と 2382/207 は DIETZ [2002] によってローマナイズされた。この断片写本の原典には *Kavikumāra* という人物と *Govṛṣāna* という大臣、*Campaka* という龍王の名前が現れる。これらの名前は *Av-klp* 第 66 章 *Kavikumāra* に見出される。したがって問題の断片写本は *Av-klp* 所収の *Kavikumāra* 物語の並行話を伝えていることがわかる。*Kavikumāra* 物語の並行話は『根本説一切有部律雜事』にも存在する。しかし次の事実、*Av-klp* 所収話が『根本説一切有部律雜事』所収話よりもスコイエン・コレクション所蔵の断片写本所収話に近いことを示唆する。

- *Av-klp* 所収話では、父王が自分を殺そうとしていることを母親から知らされた *Kavikumāra* が助けを

## 2 Av-klp 第 59 章研究ノート

以下に山崎 [2011] に掲載した原典と写本の異読とを提示し、〈飾り〉(alaṃkāra) と語・表現という点からそれぞれ先に挙げた二つの問題を考察する。提示する詩節の順序は詩節番号の順とするが、説明の都合により順序を変えた箇所もある。略号は山崎 [2011] で用いたものに同じである。

### 2.1 〈飾り〉の用例

Kṣemendra がどのような詩論観にもとづいて Av-klp を著していたかという問題については、第 74 章 Upagupta に焦点をあて、山崎 [2014] でも考察した。その結果、Kṣemendra は詩論家の厳密な定義に従った〈飾り〉を構成することよりも〈情〉(rasa) を喚起させることを重んじる著作姿勢をとっていたことが明らかになった。第 59 章についても同じことが指摘できるか。以下に同章で使用される〈飾り〉の分析を通じて検討を加えてみよう。

#### 2.1.1 第 35 詩節及び第 71 詩節

まず初めに、Kṣemendra が詩論家の定義に従い〈飾り〉を構成している用例を見よう。第 35 詩節と第 71 詩節がその好例である。前者の原文は次の通りである。

tasyāḥ śaśāṅkopamam ānaṃ tat  
(a) samunmiṣat (b) pāpamalaṃ kumāraḥ |  
draṣṭuṃ na sehe sahasā viśāda-  
lajjānimīladvadanāravindaḥ || 59.35 ||

[35] 彼女(ティシュヤラクシャー)の月に似たその顔は (a) 煌々と輝いているにもかかわらず、過失のせいで (b) 汚れているのを太子は見るに耐え難かった。彼は失望し恥ずかしさを感じたので蓮華のような顔を瞬時に下に向けてしまった<sup>2</sup>。

求めた先は Campaka 龍王だが、『根本説一切有部律雜事』所収話では、龍王と異なる人物である。また『根本説一切有部律雜事』所収話では龍王の名前が明かされない。

- 『根本説一切有部律雜事』所収話では、名前のある登場人物と名前のない登場人物の数がそれぞれ六人、17 人であるのに対し、Av-klp 所収話では、それぞれ 12 人、九人である。
- Av-klp 所収話と『根本説一切有部律雜事』所収話の登場人物は、主人公 Kavikumāra を除いて、名前の点で一致しない。
- 主人公 Kavikumāra の母親が『根本説一切有部律雜事』所収話では王の第一夫人であるのに対し、Av-klp 所収話では第二夫人である。王が送った刺客から逃れて森に隠れた Kavikumāra を殺害しようとするヤクシャの名が『根本説一切有部律雜事』所収話では Piṅgala であるのに対し、Av-klp 所収話では Sudāsa である。
- 名前以外の点で、『根本説一切有部律雜事』所収話と Av-klp 所収話が相違する点は 14 点ある。

Av-klp 所収話の第 1, 3–104 詩節は、若干の相違点を除き、後期アヴァダーナ文献 Kalpadrumāvadānamālā 所収話の第 6, 32–132, 138 詩節と同一である。Av-klp 所収話の第二詩節にあたる詩節は Kalpadrumāvadānamālā 所収話にないが、Kalpadrumāvadānamālā 所収話第 13–31 詩節と内容の点で同じである。Kalpadrumāvadānamālā 所収話が Av-klp 所収話を材源としており、その逆はありえないことは明白である。なぜなら、Kṣemendra のような評判の高い詩人が作者不明のアヴァダーナ集成から一つの章をまるごと借用したとは考えられないからである。確かに後期アヴァダーナ文献が Av-klp に先行するという説が提唱されたことはあるが、韻律 anuṣṭubh の形式を分析すると、Av-klp 所収話と Kalpadrumāvadānamālā 所収話の間に大きな差異があることが判明する。この事実は前者が後者に先行することを裏づける。

<sup>2</sup>PW が挙げる、動詞語根 ni-mīl が「目を閉じる」(„die Augen schließen“) という行為を表示する古典期の用例のうち、註釈家による語釈が与えられているものは Kālidāsa (西暦 4–5 世紀) の Raghuvamśa 第一章第 68 詩節と第七章 61 詩節、第 12 章第 65 詩節である。しかしいづれについても Mallinātha による語釈は PW が挙げる意味を支持しない。nimīlitamukha という複合語の用例を探すと、Raghuvamśa 第 19 章第 28 詩

この詩節で用いられている〈飾り〉は〈矛盾〉(virodha)である。詩論家 Rudraṭa (西暦九世紀後半)はこの〈飾り〉を次のように定義する。

*Kāvyaḷamkāra* 9.30: yasmin dravyādīnām parasparaṃ sarvathā viruddhānām |  
ekatrāvasthānaṃ samakālaṃ bhavati sa virodhaḥ ||

どのようなあり方であれ互いに矛盾する実体を始めとするものが一つの場所に同時に存在しているならば、それは〈矛盾〉である<sup>3</sup>。

Namisādhū 註によれば、「実体を始めとするもの」(dravyādīnām)とは実体(dravya)と属性(guṇa)、行為(kriyā)、種(jāti)という四つである。Rudraṭa はさらに〈矛盾〉を「種類を同じくするもの」(sajātīya)と「種類を異にするもの」(vijātīya)という二種類に下位分類する。前者は互いに矛盾する二つの実体あるいは二つの属性、二つの行為、二つの種が同一場所に同時に存在するものである。後者は互いに矛盾する実体と属性、実体と行為、属性と行為、属性と種、行為と種が同一場所に同時に存在するものである。Rudraṭa によれば、種と実体の〈矛盾〉は存在しない<sup>4</sup>。なぜなら種は実体に必ず依拠するからである<sup>5</sup>。

Av-klp 第 59 章第 35 詩節で用いられる〈矛盾〉は、〈種類を同じくする矛盾〉の下位に区分される〈属性の矛盾〉に分類される。Rudraṭa の例を見よう。

*Kāvyaḷamkāra* 9.35: satyaṃ tvam eva (c)saralo jagati (d)jarājanitakubjabhāvo 'pi |  
brahman param asi (e)vimalo (f)vitatādhvaradhūmamalino 'pi ||

他ならぬ貴殿は老いで背中が (d) 曲がってしまっているけれども、この世で本当に (c) まっすぐな人だ。梵天よ、貴殿は盛大な供犠の祭式の煙で (f) 汚れているけれども、完全に (e) 汚

節にその用例が見られる。

*Raghuvamśa* 19.28: darpaṇeṣu paribhogadarśinīr  
narmapūrvam anupr̥sthasamsthitaḥ |  
chāyayā smitamanojñayā vadhūr  
hr̥nimīlitamukhīś cakāra saḥ ||

彼(アグニヴァルナ)はふざけて、鏡の中に肉体的快樂〔の印〕を見るのを習慣とする女達の背後に立ち、〔鏡に映った〕微笑みで魅力的な自分の影像でもって、彼女達を恥じらいでうつむかせた。

d 句の hr̥nimīlitamukhī という語に対する Mallinātha 註 (Mallinātha on *Raghuvamśa* 19.28 [550.23])を見ると、hr̥nimīlitamukhīr lajjāvanatamukhīś (「恥じらいでうつむいた」)とあり、この用例でも PW が挙げる意味を註釈は支持しない。APTE は動詞語根 ni-mīl が「目を閉じる」(“to shut the eyes”)という行為を表示している用例として *Manusmṛti* 第一章第 52 詩節の用例を挙げる。関連箇所の内容は次の通りである。

*Manusmṛti* 1.52cd: yadā svapiti śāntātmā tadā sarvaṃ nimīlati ||

〔その神が〕 平静な心で眠りにつく時、一切〔世界〕は帰滅する。

問題箇所に対する Medhātithi 註 (Medhātithi on *Manusmṛti* 1.52 [31.8]) は pralayaṃ prāpnoti (「帰滅する」)とあり、「眼を閉じる」という意味を支持しない。本詩節の場合、確かに直前の第 34 詩節に「地面に視線を向け (nirīkṣamāṇaḥ kṣitim)」とあり、nimīlita という語が vadanāravinda 「蓮華のような顔」という語を後分要素として複合語を形成していることを考慮すれば「眼を閉じる」という意味が期待されようが、以上の用例に従う限り、「うつむく」という意味に解釈するのが無難であろう。

<sup>3</sup>Namisādhū on *Kāvyaḷamkāra* 9.30 (127.23–25): yatra dravyaguṇakriyājātīnām viruddhānām ekatrādhāre 'vasthānaṃ bhavati sa virodhaḥ | parasparaṃ anyonyam | na tv ādhāreṇa saha | tathā sarvaprakāraṃ sajātīyair vijātīyaiś ca sahetya arthaḥ | samakālam iti yugapat | (「矛盾する実体と属性、行為、種が一つの場所に存在しているならば、〈矛盾〉である。互いに (parasparaṃ = anyonyam) [矛盾する]。しかし場所を除いて。そしてまたすべての形で、種類を同じくするものと種類を異にするものを含めてという意味である。同時にとは時を同じくして [という意味である]。)」)

<sup>4</sup>*Kāvyaḷamkāra* 9.32ab: jātidravyavirodho na sambhavaty eva tena na ṣaḍ ete | (「種と実体との〈矛盾〉は絶対にはありえないので、これら(種類を異にする〈矛盾〉)は六つとはならない。)」)

<sup>5</sup>Namisādhū on *Kāvyaḷamkāra* 9.32 (128.7): nityam eva dravyāśritatvāj jāter na jātidravyayor virodha ity arthaḥ | (「種は必ず実体に依拠するから、種と実体との矛盾は存在しないという意味である。)」)

れを離れた御方だ。

Namisādhu 註によれば、この例では (c)「まっすぐな」(sarala) という属性と矛盾する (d)「曲がっている」(kubja) という属性、(e)「汚れを離れた」(vimala) という属性と矛盾する (f)「汚れている」(malina) という属性が「梵天」という同一場所に同時に存在するという<sup>6</sup>。Av-klp 第 59 章第 35 詩節の例では、(a)「煌々と輝いている」(samunmiṣat) という属性と矛盾する (b)「汚れている」(mala) という属性が「顔」(vadana) という場所に同時に存在することになる。

Kṣemendra が〈矛盾〉を用いている詩節のもう一つの例が第 71 詩節である。

(a)atyantamandāgnir api (b)\*prasakta-  
**pradīptaśokānaladahyamānaḥ** |  
 (c)pravṛddhatṛṣṇo 'py (d)anapetajādyah  
 sukhī gatāsura na tu dīrgharogī || 59.71 ||

**71ab** \*prasaktapradīptaśokānala° ] Ex conj. Ed.; prasaktadīptaḥ śokānala° A; prasaktaḥ pradīptaśokāgni° B; prasaktaḥ pradīptaśokānala° E; prasaktapradīptaḥ śvakānala° DZ.

[71] [私(アショーカ)の] 体の消化を促す火は著しく (a) 衰えているけれども、絶えず (b) 激しく燃え続ける悲しみの火に [私は] 焼かれている<sup>7</sup>。[私の] (c) 渴望は増すばかりなのに、(d) けだるさは抜けない。楽な者は命尽きた者であって、長い間患う者ではないのだ。

詩節前半 ab 句では (a)「衰えている」(manda) という属性と矛盾する (b)「激しく燃えている」(pradīpta) という属性とがアショーカという同一場所に同時に存在することが述べられている。したがってこの〈矛盾〉は〈属性の矛盾〉に分類される。しかし後半 cd 句の〈矛盾〉は〈属性の矛盾〉には分類できない。これが分類されるのは〈実体の矛盾〉である。Rudraṭa が挙げる例を見よう。

*Kāvyaḷamkāra* 9.34: atrendranīlabhittiṣu guhāsu śaile sadā suvelākhye |  
 anyonyānabhibhūte (e)(f) **tejastamasī pravartete** ||

スヴェーラと呼ばれる山の中にある、壁面が蒼玉でできているこの洞窟の中では (e) 鋭い光と (f) 暗闇とがつねに互いを打ち消し合うことなく存在している。

Namisādhu 註によれば、この詩節では互いに矛盾する (e)「鋭い光」(tejas) と (f)「暗闇」(tamas) という二つの実体が「洞窟」(guhā) という同一場所に同時に存在するので<sup>8</sup>、〈実体の矛盾〉が成立するという。Av-klp 第 59 章第 71 詩節 cd 句では互いに矛盾する (c)「渴望」(tṛṣṇā) と (d)「けだるさ」(jāda) という二つの実体が「アショーカ」という同一場所に同時に存在することになる。したがって第 35 詩節と第 71 詩節 ab 句で用いられる〈矛盾〉は〈属性の矛盾〉に、第 71 詩節 cd 句で用いられるそれは〈実体の矛盾〉に、Rudraṭa の定義にもとづいて、明確に分類することができる。

### 2.1.2 第 27 詩節

以上に対し、次の〈飾り〉の用例は詩論家の定義に従って構成されたものとは言えない。原文を見よう。

<sup>6</sup>Namisādhu on *Kāvyaḷamkāra* 9.35 (128.21): atra saralatvakubjatvādiviruddhaguṇāvasthitih || (「ここではまっすぐな状態と曲がっている状態を始めとする矛盾する属性が存在している [ことが述べられている]。)」)

<sup>7</sup>DE JONG が指摘するように、梵文写本 AE 及び梵文音写が anala「火」という読みを伝えるのに対し、梵文写本 B のみが agni という読みを伝える。またいずれの写本も prasaktaḥ ないしは dīptaḥ という読みを伝えるが、校訂本の prasaktapradīptaśokānala° という読みをとるべきであろう。

<sup>8</sup>Namisādhu on *Kāvyaḷamkāra* 9.34 (128.18): atra tejastamasor viruddhadravayayor ekatra guhādhāre 'vasthitir uktā || (「ここでは鋭い光と暗闇という矛盾する二つの実体が洞窟という同一の場所に存在していることが述べられている。)」)

madoddhatānām ghanamohakāle

(c) prakṣobhitānām (d) makarāṅkapātaiḥ |

(a) taraṃgiṅīnām iva (b) nāṅganānām

(e) śvabhṛāvapāte 'sti manān nirodhaḥ || 59.27 ||

27c nāṅganānām ] AEDZ (Ed.); nāṅganā B. 27d śvabhṛāva° ] B (Ed.); svabhṛāva° A; svabhāva° EDZ, Tib. has *rang bzhin* (\*svabhāva°).

[27] 心の深い迷いが生じている時、(d) 海獣を印とする者(カーマ)に襲われることで、およそ(b) 女というものは情欲で心がいっぱいになり、(c) [その心を] 激しくゆさぶられるものである。そんな女達が(e) 地獄へ墮ちる時<sup>9</sup>、彼女達を引きとめるすべは全くない。(d) 海へ落ちていくことで、およそ(a) 河というものが(c) 波立てられ、(e) 滝壺へ落ちる時には、それを抑止するすべが全くないように。

Kṣemendra は c 句の「河」(taraṃgiṅīnām) という語と「女」(aṅganānām) という語をそれぞれ比喻基準と比喻対象とする〈直喩〉(upamā) を用い、比喻基準にあたる語と比喻対象にあたる語とを同格もしくは異格で限定する語に二つの意味を与える。これは詩論家 Daṇḍin が〈掛詞による直喩〉(śliṣṭopamā) に分類する〈飾り〉である<sup>10</sup>。問題の詩節の比喻基準にあたる語と比喻対象にあたる語の限定句の意味の対応は次の通りである。

	比喻基準	比喻対象
	(a) 河 (taraṃgiṅīnām)	(b) 女 (aṅganānām)
(c) prakṣobhitānām	波立てられる	激しくゆさぶられる
(d) makarāṅkapātaiḥ	海への落下	海獣を印とする者(カーマ)の攻撃
(e) śvabhṛāvapāte	滝壺への落下	地獄へ墮ちること

注意すべきは、〈掛詞による直喩〉では二つの意味を表示し語形を同じくする語によって比喻基準にあたる語と比喻対象にあたる語とがともに限定されねばならないことである。しかし a 句を構成する madoddhatānām 「情欲で心がいっぱいになった者」という複合語と ghanamohakāle 「心の深い迷いが生じている時」という複合語とは、二つの意味を表示する原則に反し、比喻対象である「女」という語だけを限定している。

### 2.1.3 第 25 詩節及び第 28 詩節

興味深いことに、後続する第 28 詩節で用いられている〈飾り〉も、詩論家達によって〈欠陥〉(doṣa) と見なされる問題点を含んでいる。原文は次の通りである。

sā taṃ babhāṣe madanābhibhūtā

\*pragalbhasaṃrambhaviśṛṅkhaleva |

pāpāvapāte śucinā kalaṅka-

(a) bhītyeva (b) śīlena vimucyamānā || 59.28 ||

28b \*°viśṛṅkhaleva ] Ex conj. DE JONG; °viśṛṅkhalena ABE (Ed.); °viśṛṅkhalena DZ, Tib. has *nam par ma bsdams pas* (\*°viśṛṅkhalena).

<sup>9</sup>該当箇所については二系統の読みがある。梵文写本 B は śvabhṛāvapāte、梵文写本 E 及び梵文音写は svabhāvapāte という読みを示す。Tib. は後者を支持するが、後者をとると詩節の意味が通じなくなる。梵文写本 A は svabhṛāvapāte (s.e. for śvabhṛāvapāte) という読みを示すので、本来の読みは梵文写本 B が伝える読みであり、śvabhṛāvapāte→svabhṛāvapāte→svabhāvapāte と筆写伝承されていったものと思われる。したがって梵文写本 B が伝える読みをとる。

<sup>10</sup>Daṇḍin による定義については山崎 [2017a] を参照されたい。

[28] 彼女は愛欲に負けてしまい、悪に堕ちて行く時、不名誉〔を招くこと〕への (a) 恐れを捨てるように、清浄な (b) 品行を捨てて彼に言った。その彼女はあたかも、恥ずべき強い欲求のために束縛を失ってしまったかのようにだった<sup>11</sup>。

この詩節では (a)「恐怖」(bhītyā) という語と (b)「品行」(śīlena) という語とをそれぞれ比喩基準と比喩対象とする〈直喩〉が用いられている。注意すべきはこの二つの語が文法上の性の点で一致しないことである。すなわち前者は女性であるのに対し、後者は中性である。比喩基準と比喩対象とが文法上の性と数、格の点で一致しない〈直喩〉の使用を詩論家達は禁じている。そしてその用例数は詩論が確立しそれが詩人達に定着するにつれ減少する<sup>12</sup>。しかし詩論確立期の美文作品に用例がない訳ではない。我々は戯曲詩人 Bhavabhūti (西暦八世紀) の *Mālatīmādhava* 第九幕第 10 詩節に同様の用例を見ることができる。

*Mālatīmādhava* 9.10: sarasakusumakṣāmair aṅgair anaṅgamahājvaraś  
ciram aviratonmāthī soḍhaḥ pratikṣaṇadāruṇaḥ |  
(a) **ṭṛṇam** iva tataḥ (b) **prāṇān** moktuṃ mano vidhṛtaṃ tayā  
kim aparam ato nirvyūḍhaṃ yat karārpaṇasāhasam ||

絶え間なく苦痛をもたらし、しきりに容赦なく襲う愛の激しい熱にみずみずしい花々のように華奢な肢体で彼女は長い間耐え抜いて、それから (a) 草〔の葉〕を捨てるように (b) 命を捨てる決意をした。彼女は結婚という思い切ったことをしたと言わずして何と言えようか。

この詩節では (a)「草」(ṭṛṇam) という語と (b)「命」(prāṇān) という語をそれぞれ比喩基準と比喩対象とする〈直喩〉が用いられている。前者の文法上の数は単数であるのに対し、後者のそれは複数である。したがってこの〈直喩〉は文法上の数の一致の原則に反する。註釈家 Harihara (西暦 1150–1216 年の間) と Tripurāri (西暦 12–14 世紀の間) はこの問題に触れない。しかし註釈家 Jagaddhara (西暦 13 世紀後半から 14 世紀初め) はこれについて次のような説明を与えており、我々の注意をひく。彼によれば、ここでの数の不一致は「〈情〉ゆえに認知されないものとして、聡明な者達が嫌悪感を催さないのだから」〈欠陥〉とならないという<sup>13</sup>。西暦八世紀のカシミールでは詩論家 Vāmana が〈比喩基準〉にあたる語と〈比喩対象〉にあたる語とが文法上の性と数、格の点で一致することを〈直喩〉が成立するための条件に定めている。彼と同じ時代に同じ地域で活動した Bhavabhūti が〈欠陥〉のない〈直喩〉を構成することよりも〈情〉を喚起させることを重視している事実は注目に値しよう。Kṣemendra は韻律論書 *Suṛttatilaka* に *Mālatīmādhava* 第五幕第 30 詩節を引用しているから、問題の詩節を知っていたはずである。Bhavabhūti の先例にならい、第 28 詩節でも何らかの〈情〉を喚起させている可能性が考えられよう。

Kṣemendra が第 28 詩節で喚起させようとしているのはどのような〈情〉か。演劇論者 Dhaṃjaya (西暦 10 世紀後半) は Bharata の演劇論を体系化した演劇論書 *Daśarūpa* を著しており、その第四章は八種類の〈情〉の定義にあてられている。ここで参考になるのは〈恐怖〉(bhayānaka) の〈情〉が定義される第 74 詩節である。原文は次の通りである。

*Daśarūpa* 4.74: vikṛtasvarasattvāder bhayabhāvo bhayānakaḥ |  
sarvāṅgavepathusvedaśoṣavaicittyalakṣaṇaḥ |  
dainyasambhramasammohatrāsādis tatsahodaraḥ ||

<sup>11</sup> 梵文写本と梵文音写、Tib. の該当箇所を読みは pragalbhasamrāmbhaviśrīkhalena (Tib. bab col rtsom pa rnam par ma bsdams pas) である。しかしこれでは意味が通じない。DE JONG は相当箇所を pragalbhasamrāmbhaviśrīkhalena に修正することを提案する。梵文写本と梵文音写、Tib. いずれからも支持されないが、文字 n と文字 v の字形に起因する誤写と考えれば、DE JONG が提案する読みを本来の読みと考えて問題ないのではないか。

<sup>12</sup> この点については山崎 [2016, 2017b] を参照されたい。

<sup>13</sup> Jagaddhara on *Mālatīmādhava* 9.10 (381.9–10): rasāntargatatvena dhīmatām anudvegāt |

異様な音や異様な生物を始めとするものに対する〈恐れ〉を〈[基本的]感情(sthāyibhāva)〉とするのが〈恐怖〉[という〈情〉]である。それ(〈恐怖〉)と一緒に生まれる〔〈感情表現〉(anubhāva)は]全身の震えや汗、憔悴、意識の喪失に特徴づけられ、〔〈付随的感情〉(vyabhicāribhāva)は]憂鬱や混乱、心の迷い、おびえを始めとするものである<sup>14</sup>。

以上の〈感情表現〉や〈付随的感情〉を特徴づける語は Av-klp 第59章第28詩節にないが、前後の第25詩節と第33詩節にそれを見ることができる。原文を見よう。

uktveti taṃ sā sahasā bhujābhyām  
utsrjya lajjāṃ dr̥dham ālilinga |  
**prakampasīñjāmukharair asaktaṃ**  
nivāryamāñbharaṇair iva svaiḥ || 59.25 ||

25a uktveti ] BDZ (Ed.); ukteti AE.

uktveti sā **kampataramgitāngī**  
śvāsābhibhūtādharapallavaśrīḥ |  
**svedāmbunaśyattīlakā vikāraṃ**  
smaropadiṣṭaṃ prakāṣaṃ babhāra || 59.33 ||

33c °naśyattīlakā vikāraṃ ] AEDZ (DE JONG); °naśyaṃ tilakā vikāraṃ B; \*°naśyattīlakādhikāraṃ Ex conj. Ed.

[25] このように述べて、彼女は恥じらいを捨て、不意に両腕で彼を強く抱きしめた。その彼女はあたかも、激しく震えるせいでジャラジャラと音を立てる、自分の諸々の装飾具に絶え間なく制止されているかのようなようだった。

[33] 以上のように彼女は語った。その彼女は震えで手足が波のように震え、新芽のような唇の美しさは吐息ですっかり失われ、額印は汗で消え、性愛に特徴づけられる身体の変化をはっきりとそなえていた。

第25詩節c句と第33詩節a句で「震え」(prakampa/kampa)、第33詩節c句で「汗」(sveda)という語が用いられていることが指摘できよう。また第28詩節cd句に「不名誉〔を招くこと〕への恐れ」(kalañkabhīti)、先に挙げた第27詩節に「心の迷い」(moha)という語が見られることも見逃せない。以上を考慮すると次のような〈基本的感情〉と〈感情表現〉、〈付随的感情〉をこの一連の詩節から読み取ることができよう。

〈基本的感情〉	不名誉〔を招くこと〕への恐れ
〈感情表現〉	震え、汗
〈付随的感情〉	心の迷い

以上はこの一連の詩節で〈恐怖〉の〈情〉が喚起されている可能性を示唆する。Kṣemendraは詩人が〈情〉を喚起させることを〈欠陥〉のない〈飾り〉を構成することに優先させている先例を知

<sup>14</sup>Dhanika on *Daśarūpa* 4.74 (196.12–14): raudraśabdaśravaṇād raudrasattvadarśanāc ca bhayasthāyibhāvaprabhavo bhayānako rasah | tatra sarvāṅgavepathuprabhṛtayo ’nubhāvāḥ | dainyādayas vyabhicāriṇaḥ ... | (「すさまじい音を聞いたり、獰猛な生物を見たりすることに対する〈恐れ〉という〈基本的感情〉から生まれるのが〈恐怖〉という情である。それに関する〈感情表現〉は全身の震えを始めとするものである。〈付随的感情〉は憂鬱を始めとするものである。」。) HAAS [1912: 145] は a 句を “from change of voice, loss of courage” と訳すが、ここで用いられている sattva という語は、Dhanika 註に従う限り、「生物」(“being, creature”) という意味に解釈すべきであろう。“[... an intensified emotion, whose basis is fear] of strange sounds, strange beings, and others” という訳が穏当ではないか。



り、本来であれば〈欠陥〉を含んでいるとみなされる〈掛詞による直喩〉と〈直喩〉をそれぞれ第 27 詩節と第 28 詩節で使用したと考えられよう。

## 2.2 語と表現

次に Kṣemendra がどのような文学的伝統に依拠して Av-klp を著していたかという問題を考えよう。SPEYER [1906–1909: I, xi–xii] が指摘するように、Kṣemendra の息子 Somendra は父親が仏教詩人 Gopadatta (西暦五世紀から八世紀後半) の *Jātakamālā* に代わる仏教美文作品を書くよう依頼されて Av-klp を著したことをその奥書に記している<sup>15</sup>。また Kṣemendra が Av-klp 第一章 Prabhāsa と第 64 章 Sudhanakinnarī を著すにあたり、Haribhaṭṭa (西暦五世紀頃) の *Jātakamālā* 所収の並行話を参照していたことも指摘されている<sup>16</sup>。確かに Av-klp 第 59 章で使用される語や表現と類似した語や表現を仏教美文作品に我々は見出すことができる。以下にその例を見よう。

### 2.2.1 第 15 詩節

初期の仏教美文作品に類似表現が見られる用例として、我々は第 15 詩節を挙げることができる。

idaṃ hi nīlotpalapallavābhaṃ  
vilocanaṃ nāma nṛṇāṃ viśālam |  
**rāgoragacchidrasamudram** eva  
yenendriyāṇy āśu \*parisravanti || 59.15 ||

**15d** \*parisravanti | Ex conj. Ed. (DE JONG); pariśravanti ABE; pariśravanati DZ, Tib. has *yongs ngal byed* (\*pariśramayati).

[15] なぜなら、じつにこの大きな眼は青睡蓮の花弁のように見えるからだ。その眼のせいで人々の諸感官は、じつに色欲という蛇が棲む過失という大海へたちまち流れて行くのだ。

c 句の rāgoragacchidrasamudram という複合語の解釈は難しい。問題の複合語は動詞語根 pari-sru によって表示される行為の〈目的〉(karman)であるから、「x に流れる」という行為との意味的連関を考えれば、rāgoragacchidra eva samudraḥ と分析される同格限定複合語に解釈できよう。次に後分要素 chidrasamudra に対する前分要素 rāgoraga をどのように分析すべきか。この問題に糸口を与えるのは Aśvaghōṣa (西暦二世紀頃) の *Saundarananda* 第三章第 14 詩節である。

*Saundarananda* 3.14: sa hi **doṣasāgaram** agādham **upadhijalam ādhijantukam** |  
**krodhamadabhayataramgaçalam** pratatāra lokam api vyatārayat ||

なぜなら彼(仏陀)は、深さが測り知れない、執着という水をたたえ、心の苦しみという下等生物が棲み、怒りと慢心、恐怖という波で落ち着くことのない過失という海を渡り、そして人々も渡らせたのであるから<sup>17</sup>。

<sup>15</sup> 仏教詩人 Gopadatta の年代については HAHN [1993: 49–53] を参照せよ。

<sup>16</sup> それぞれ STRAUBE [2006: 8–35] 及び STRAUBE [2009: 307–311] を見よ。Haribhaṭṭa の年代については HAHN [1993: 40–45] を参照せよ。

<sup>17</sup> c 句を構成する複合語 krodhamadabhayataramgaçala については、これを krodhamadabhayam eva taramgo yasmin 「怒りと慢心、恐怖という波が生じる」と分析される処格所有複合語を前分要素、cala という語を後分要素とする同格限定複合語として、全体を krodhamadabhayataramgaś cāsau calaś ca 「怒りと慢心、恐怖という波が生じていて、落ち着くことがない」とも解釈可能であろう。なお COVILL [2007: 67] の ādhijantukam という複合語に対する訳 “which (scil. the sea of faults) is watered by conditioned existence” は簡明さを考慮した訳であろうが、JOHNSTON [1928: 16] の英訳 “whose (scil. the flood of evil) waters are the determinants of existence” が〈隠喩〉の構造を明確に示している点で正確と言えるだろう。

この詩節では doṣa 「過失」という語と sāgara 「海」という語とをそれぞれ比喩基準と比喩対象とする〈隠喩〉(rūpaka) 複合語が用いられている。注目すべきは、後続する upadhijala、ādhijantuka、krodhamadabhayataraṅga<sup>o</sup> という複合語もすべて〈隠喩〉複合語であり、それらの比喩基準と比喩対象もそれぞれ「過失」と「海」という語に意味的に対応していることである。その対応は次の通りである。

過失 (doṣa)	海 (sāgara)
執着 (upadhi)	水 (jala)
心の苦しみ (ādhi)	下等生物 (jantuka)
怒りと慢心、恐怖 (krodhamadabhaya)	波 (taraṅga)

以上の用例を考慮するならば、問題の詩節にも次のような意味的な対応が求められよう。

過失 (chidra)	大海 (samudra)
色欲 (rāga)	蛇 (uraga)

この対応から考えて、rāgoraga という複合語は rāga eva urago yasmin 「色欲という蛇が棲む」と分析される、chidrasamudra という〈隠喩〉複合語を限定する処格所有複合語と考えるべきであろう。問題の複合語は「色欲という蛇が棲む過失という大海」と解釈できよう。

## 2.2.2 第83詩節及び第90詩節

仏教詩人 Gopadatta の作品に類似表現が見られる詩節として、我々は第83詩節及び第90詩節を挙げることができる。まず第83詩節の原文を見よう。

krūrāśayā krūradhiyaiva dāsyā  
 hatvā tam utpāṭitanābhikośam |  
 tasyāntralagnaṃ paruṣaṃ dadarśa  
 ghrṇāvihīnā vikṛtaṃ kṛmim sā || 59.83 ||

83d vikṛtaṃ ] AE (Ed.); vikṛtim B; vikṛta DZ.

[83] 彼女(ティシユヤラクシャー)は無慈悲であったので、残忍な意図をもって、じつに残忍な心をした婢を使って<sup>18</sup>、突き出た臍を切り裂いて彼を殺害し、彼の内臓にとどまっている、まだら色の奇妙な寄生虫を目にした。

b 句末に現れる nābhikośa という語の用例は管見の及ぶ限り見出されないが、臍ヘルニアを指す語と考えられる。土着辞典類の用例以外で、kośa という語が身体の一部を指す語を前分要素とする複合語の後分要素となって「球」(„Kugel“) という意味を表示する用例として PW が挙げるのは Rāmāyaṇa 第三巻第79章第28詩節の用例のみである。しかしこれと同じ意味で用いられる用例はヒन्दウー教美文作品にない。興味深いことに、akṣikośa 「眼球」という語の用例が Gopadatta に

<sup>18</sup>a 句については別解釈も想定されうる。krūrāśayā を krūrā āśā yasyāḥ 「残忍な意図を抱く女」と分析される属格所有複合語と考えれば、a 句を「残忍な意図を抱き、じつに残忍な心をした婢を使って」と解釈することも可能である。しかしこの場合 dāsyā 「婢」という語を限定する krūrāśayā と krūradhiyā という二つの所有複合語を並列するための等位接続詞を欠き文として不自然である。ここでは krūrāśayā と krūradhiyā という語をそれぞれ同格限定複合語と所有複合語として、a 句を「残忍な意図を以て、じつに残忍な心をした婢を使って」と解釈した。対応する Tib. は gdug pa'i bsam pas 'bangs mo gdug pa'i blos 「残忍な考えから、残忍な心をした婢を使って」であり、この解釈を支持する。

帰せられる *Jātakamālā* と *Saptakumārikāvadāna* にそれぞれ三例、一例見られる。ここに後者の例を原文とともに挙げるならば、次の通りである。

*Saptakumārikāvadāna* 42: vivṛtavikṛtapūtiguhyaśaṃ  
dharanirajo'ruṇarūkṣakeśapāśaṃ |  
khaganakhamakhaḥkhaṇḍitākṣikośaṃ  
dadṛśur athojjhitam aṅganāyāḥ ||

次に〔七人の王女達は〕女がおもむく人が寄りつかない場所を見た。その場所は風雨にもろにさらされ、異様で、異臭を放ち、誰も足を踏み入れたがらず、〔散らばる〕髪のはらは大地から舞い上がる埃で赤く染まって干乾び、〔散らばる〕眼球は鳥達の爪や嘴で破壊されていた。

以上の用例は、kośa という語が「球」という意味で身体の一部を指す語とともに用いられる言語運用が西暦五世紀以降の仏教詩人達の間にあったことを示唆しよう。

次に第 90 詩節の原文を見よう。

lekhaṃ tatas taṃ nṛpaśāsanāṅkam  
ādāya mānyaṃ vinayāvanamraḥ |  
svayaṃ vibhaktākṣaralakṣitārtham  
avācayat takṣaśilādhināthaḥ || 59.90 ||

90a °śāsanāṅkam ] ADZ (Ed.); °śāsanāṅkam B; °śāsanākem E. 90c vibhaktā° ] ABEDZ (Ed.), Tib. has *gsal ba* (\*vyakta°).

[90] それからタクシャシラーの藩主は恭しく頭を下げ、畏敬されるべき、勅令の印が入ったその手紙を受取り、はっきりとした文字で示されている内容を自ら読み上げた。

問題となるのは c 句である。梵文写本と梵文音写は vibhaktā° という読みを示すのに対し、Tib. は *gsal ba* (\*vyakta°) という読みを示す。suvyaktākṣara あるいは avyaktākṣara という語の用例はそれぞれ Av-klp 第 25 章第 15 詩節、*Bhāratamañjarī* 第六章第 145 詩節に現れる。また意味を考えても Tib. が支持する読みがもっともらしく思われる。しかしこの読みは韻律上ありえない。vibhaktākṣara という語の用例は見出されないが、avibhaktavarṇa という語の用例は、Gopadatta に帰せられる *Sārthavāhajātaka* 第 50 詩節に見出される。

*Sārthavāhajātaka* 50: ārtasvarair aviratair vibhaktavarṇais  
teṣāṃ viśādaparilupatamaṅsthītīnām |  
āpūryamāṅśalilapradarāntarālaḥ  
saṃcukṣubhe bhṛśataraṃ lavaṅāmburāsīḥ ||

絶望して心の安定を失った彼等が発する、音がはっきりとせず、やむことのない悲痛の声で水を湛える岩の割れ目の隙間が満たされた海はひどく荒れ狂った。

HANDURUKANDE [1984: 53] は問題の複合語を「不明瞭な言葉」(“their words indistinct”)と解釈する。vibhaktā という語が「はっきりとした」、「鮮明な」という意味で用いられる例は上記以外になく、古典註を欠く点にも問題はあるが、上記用例では文脈から判断して HANDURUKANDE [1984] の解釈に従うべきであろう。この用例を根拠にすれば、第 90 詩節の vibhaktākṣara という語は「はっきりとした文字」と解釈できよう。

## 2.2.3 第 118 詩節

以上に対し、ヒンドゥー教美文作品に類似した語や表現が Av-klp に見られる用例も多数存在している。それらは時に写本の読みを確定する上で重要な状況証拠を与えることがある。以下にその例を見よう。

tatrāndham ālokyā nibaddhasamjñas  
 taṃ kuñjarendraḥ parivṛttavakraḥ |  
 tatsvāgatāyeva ghaṇaṃ jagarja  
 krīdāśikhaṇḍivrajadattanṛttaḥ || 59.118 ||

118d °nṛttaḥ ] ABEDZ; \*°nṛtyaḥ Ex conj. Ed.

[118] 最もすぐれた象はそこに盲目となった彼(クナーラ)がいるのを見て、〔彼がクナーラだと〕認知して顔を向けた<sup>19</sup>。その象は〔王宮で〕飼われている孔雀の群れに踊りを添えられながら、あたかも彼を歓待するためであるかのように深い鳴き声を発した。

梵文写本と梵文音写が示す d 句末の読みはすべて °nṛttaḥ である。これに対し校訂本が示すそれは °nṛtyaḥ である。Kālidāsa の *Meghadūta* 第 32 詩節 b 句には bhavanaśikhibhir dattanṛtyopahāraḥ という、問題の詩節の d 句に類似した表現が見られる。註釈家 Mallinātha が伝える詩節の原文は次の通りである。

*Meghadūta* 32: jālodgīrṇair upacitavapuḥ keśasaṃskāradhūpair  
 bandhuprītyā bhavanaśikhibhir dattanṛtyopahāraḥ |  
 harmyeṣv asyāḥ kusumasurabhiṣv adhvakhedaṃ nayethā  
 lakṣmīm paśyaṃ lalitavanitāpādarāgāṅkiteṣu ||

丸窓を通して外に流れ出る、〔女達の〕毛髪に香りを染み込ませるための〔香料の〕煙を含んで体を大きくしたお前は、家々に飼われている孔雀達によって、「友達だ」という親愛の情から、踊りという供物を与えられて、花々で芳香が漂っていて、美しい女達の足に塗られた赤い染料の跡が残された御殿の中で、ここ(ウツジャイニー)の輝かしさを目にして、旅の疲れを癒せ。

校訂者は以上の類似表現を知っており、°nṛttaḥ という見慣れない読みを採用せず、*Meghadūta* 第 32 詩節の用例に裏づけられる °nṛtyaḥ という読みを採用したと思われる。しかし注意すべきは、Vallabhadeva 註が伝える詩節と Mallinātha 註が伝えるそれとの間に四箇所異読があり、前者は dattanṛttopahāraḥ という b 句末の読みを伝えていることである。Vallabhadeva が活動した年代と地域は Kṣemendra のそれに近いから<sup>20</sup>、nṛtta という語形が西暦 10 世紀以降のカシミールで実際に用いられていたと考えて問題ないと思われる。梵文写本と梵文音写が伝える読みを採用すべきであろう。

<sup>19</sup>nibaddhasamjña という複合語の解釈は厄介である。動詞語根 ni-bandh の過去分詞と精神作用を意味する語とがそれぞれ前分要素、後分要素となって所有複合語を形成する場合、通常 snehanibaddhacetā 「心が愛情に結びついた者」というように、過去分詞 nibaddha が具格関係あるいは処格関係で結びつく名詞をともない「x に y が結びつけられた者」という意味を表示する。ところが問題の詩節には過去分詞 nibaddha と具格関係もしくは処格関係で結びつく語がない。どのように解釈すべきか。山崎 [2015: 130–131] で指摘した通り、Av-klp 第 59 章第 63 詩節に baddhamūla という複合語があり、*Śīsupālavadhā* に見られる同じ複合語を註釈家 Vallabhadeva が labdhapraṭiṣṭha という複合語で言い換えていることを考慮すれば、nibaddhasamjña という複合語が表示する意味は labdhasamjña 「認識を得た者」が表示するそれと同じではないか。labdhasamjña という所有複合語の用例は Av-klp 第 22 章第 11 詩節にある (sa labdhasamjñaḥ śīsiraiḥ payobhiḥ 「彼は冷水で意識を取り戻して」)。過去分詞 baddha が過去分詞 labdha と同じ意味を表示する用例があること、過去分詞 labdha と samjña という語をそれぞれ前分要素、後分要素とする所有複合語の用例があることを根拠に、nibaddhasamjña という複合語を nibaddhā samjña yena と分析される具格限定複合語に解釈する。

<sup>20</sup>Vallabhadeva の年代については GOODALL and ISAACSON [2003: xv–xxi] を参照せよ。

## 2.2.4 第 141 詩節

Av-klp の諸写本の相互関係は STRAUBE [2006: 60–87] 及び STRAUBE [2009: 5–17] によって明らかにされている。それによれば、Av-klp の原典校訂は最古の梵文写本 A の読みを優先する方針に従ってなされねばならない。しかし、時に梵文写本 A ではなく、梵文音写とチベット訳とにもとの正しい読みが伝えられていることがある。その読みを確定する上で、ヒンドゥー教美文作品の類例を参照することは我々にとって有益である。例を見よう。

kiṃ viśmṛto nityam avismṛtasya  
tasyāham āsannamukhonmukhasya |  
cirapravāseṇa janasya nūnam  
snehānubandhāḥ śīthilībhavanti || 59.141 ||

141b °mukhonmukhasya ] B; °sukhonmukhasya A (Ed.); °sukhonmukhosya E; °mukhonmukhasyā DZ, Tib. has *bzhin ras la mngon phyogs* (\*°mukhonmukhasya).

[141] いつも〔物事を〕忘れてたりなどせず、〔私と〕近くで顔を合わせていたのに、彼(クナーラ)はどうして私のことを忘れてしまったのか。異国に長い間留まっていれば、きっと人の愛情による結びつきというものも緩くなってしまうものなのだろう。

b 句末の梵文写本 A の読みは °sukhonmukhasya である。梵文写本 E の読み °sukhonmukhosya (s.e. for *sukhonmukhasya*) はこれを支持する。他方若い梵文写本 B の読みは °mukhonmukhasya である。梵文音写の読み °mukhonmukhasyā (s.e. for °*mukhonmukhasya*) と Tib. *bzhin ras la mngon phyogs* は梵文写本 B の読みを支持する。校訂本は梵文写本 A の読みをとる。確かに最古の梵文写本 A の読みを優先する原則に従えば、校訂者の判断は正しいように思われる。また mukhonmukha という語の用例は Śrīharṣa (西暦 12 世紀) の *Naiṣadhīyacarita* 第六章第 100 詩節に見られる。

*Naiṣadhīyacarita* 6.100: prakṣīṇa evāyūṣi karmakṛṣṭe  
narān na tiṣṭhaty upatiṣṭhate yaḥ |  
bubhukṣate nākam apathyakalpaṃ  
dhīras tam āpātasukhonmukhaṃ kaḥ ||

〔人々が〕なした業を通じて得た寿命が完全に尽きる時、天界は人々のもとを訪れるけれども、寿命が存続している時、訪れることはない。即座に快樂をもたらすからといって、どうして聡明な者が不適切な食物に等しい天界を楽しもうとしたりしようか。

意味の点ではどうか。āsannasukhonmukhasya という複合語は「身近にある快樂を楽しもうとする〔彼〕」とも解釈できよう。しかしここで梵文音写と Tib. とが梵文写本 B の読みを支持するという事実を我々は看過すべきではない。次の三点にも注意すべきである。

- 文字 mu→文字 su という誤写は想定できるが、その逆は想定されにくい。
- Kṣemendra は該当箇所では mukhonmukha という表現を用いることで子音/m/と子音/kh/による〈同子音反復〉(anuprāsa)を意図していた可能性が考えられる。
- かりに sukhonmukha という読みをとったとして、問題の文脈では何がもたらす「快樂」なのか。意味不明である。*Naiṣadhīyacarita* 第六章第 100 詩節の用例からは天界(nāka)が快樂(sukha)をもたらすことが理解されるが、問題の文脈からは何が快樂をもたらすのか理解されない。

以上は梵文写本 A が伝える sukhonmukha という読みが mukhonmukha という読みから派生した二次的な読みである可能性を示唆する。では mukhonmukha という複合語の用例は存在するか。表示

される意味は同一ではないが、同じ複合語は Māgha (西暦 7–8 世紀頃) の *Śisūpālavadha* 第 13 章第 27 詩節に見られる。

*Śisūpālavadha* 13.27: pratinādapūritadigantaraḥ patan  
puragopuraṃ prati sa sainyasāgaraḥ |  
ruruce himācalaguhāmukhonmukhaḥ  
payasām pravāha iva saurasaindhavaḥ ||

諸方の空間をこだまでいっばいにし、都城の門めがけて進んで行くその海のような軍勢は、ヒマーラヤの洞穴の入り口に向かって行くガンガー河の水の流れのように見えた。

以上の点を考慮するならば、我々は梵文音写と Tib. とによって支持される梵文写本 B の °mukhonmukhasya という読みを本来の読みと判断し、これをとるべきであろう。

### 2.2.5 第 59 詩節

Av-klp 第 59 章を構成する詩節には、前後の文脈だけから原文を解釈するのが難しい詩節がある。その場合、ヒンドゥー教大美文作品 (mahākāvya) の詩節がそれらの詩節を解釈する鍵となることがある。以下に例を見よう。

tataḥ purīm takṣaśilābhidhānām  
mahīpateḥ kuñjarakarṇanāmnah |  
**senārajaḥpuñjavinirjitārkaṃ**  
jetuṃ kumāraṃ visasarja rājā || 59.59 ||

59a purīm | ABE (DE JONG); purān DZ; \*puraṃ Ex conj. Ed.

[59] それから〔アショーカ〕王はクンジャラカルナという名の王が領有するタクシャシラーという名の都城を服従させるために太子を送り出した。彼は軍勢が立てる大量の砂埃で太陽の光を遮っていた。

c 句を文字通り解釈すると「軍勢が立てる大量の砂埃で太陽を征服した〔太子〕」となろう。しかし意味不明である。直後に不変化辞 *iva* があれば「あたかも軍勢が立てる大量の砂埃で太陽を征服するかのように見えた」という〈詩的空想〉(utprekṣā) に解釈できようが、問題箇所不変化辞 *iva* はない。この解釈は不可能である。nirjitārka という所有複合語あるいはこれに類似した所有複合語の用例は管見の及ぶ限り見られない。しかし vijitendu 「月に勝利した者」という所有複合語は Ratnākara (西暦九世紀) の大美文作品 *Haravijaya* 第 25 章第 55 詩節に見られる。同詩節を Alaka 註の説明とともに見よう。

*Haravijaya* 25.42,55: upāsyamānām śiśiropacāravagrātmanā tatra sakhījanena |  
niketanāntaḥ kadalīgrhasya garbhe niṣaṇṇām dayitām apaśyat ||  
sabhrūlatāṣaṭpadamālayauṣṭhadalābhirāmām śriyam udvahantya |  
avāptavaktrāśrayayāravindakāntya pratīpaṃ **vijitendubimbām** ||

[42] その御殿の中にある芭蕉の葉でできた家の中に座って、やさしく身の回りの世話をすることに専念する侍女達にかしづかれている妻を彼は見た。

[55] その妻は、蜂の群れのような円弧を描く眉をしており、葉のような唇で魅力的な輝きを帯び、顔という身を寄せる場所を手に入れた蓮華の美しさで逆に満月を凌いでいた。

蓮華の美しさを凌ぐ月が、逆に蓮華によって美しさの点で凌駕されていることについて、注釈者 Alaka は次のように説明する。indoh kamalakāntikadanahetutvena prasiddheḥ (「月は蓮華の美しさを消失させる原因として周知されているから。」。)。この Alaka 註の説明を参考にすると、動詞語根 vi-nir-ji が表示する行為は「人/事物 x が持つ属性 y を無力にする/消失させる」という行為ではないか。したがってこれを問題の詩節の文脈にあてはめれば「太陽が持つ属性が消失した」ということであろう。では太陽が持つどのような属性か。それを知る手掛かりが *Naiṣadhīyacarita* 第 16 章第四詩節にある。Nārāyaṇa の註釈とともに原文を見よう。

*Naiṣadhīyacarita* 16.4: nalasya nāsīrasrjām mahībhujām  
kirīṭaratnaiḥ punaruktadīpayā |  
adīpi rātrau varayātrayā tayā  
**camūrajomiśratamisrasampadā** ||

その求婚者達がなす列は、軍勢が立てる砂埃と深い闇を混じり合わせているにもかかわらず、ナラの軍勢の先頭に行く王達の冠の宝珠で燈明が不要になり、夜中に明々と光を放っていた。

Nārāyaṇa on *Naiṣadhīyacarita* 16.4 (638.21–26): tayā varasya bhaimīvarasya nalasya yātrayā | varā vā yātrā tayā | rātrāv adīpi śīśubhe | kimbhūtayā | nalasya nāsīrasrjām senāyām agresarībhūtānām mahībhujām rājñām kirīṭaratnaiḥ svenāvāndhakāranirākaraṇāt punaruktā vyarthīkṛtā dīpā yasyām tayā | tathā camūrajobhir miśrā bahūkṛtā tamisrasampat timirasamgho yayā | mahāndhakāre 'pi ratnadīpaprakāśair bhūyīṣṭhaprakāśatvād adīpīty arthaḥ | mahāndhakāra eva hi dīpāḥ śobhanta ity arthaḥ | rājñām senāmukhāgravartitvena nalasya cakravartitvaṃ sūcitam |

求婚者つまりピーマの娘の求婚者、すなわちナラのその列は〔光を放っていた〕。あるいはその最高の列は夜中に光を放っていた (adīpi = śīśubhe)。【問】どのような〔列〕か。【答】ナラの軍勢の先頭に行く (nāsīrasrjām = senāyām agresarībhūtānām) 王達 (mahībhujām = rājñām) の冠の宝珠が、じつにひとりで闇を除くので、燈明が不要になった (punaruktā = vyarthīkṛtā) 〔列〕。そしてまた深い闇 (tamisrasampat = timirasamghaḥ) を軍勢がたてる砂埃と混じり合わせた、すなわちいっぱいにした〔列〕。深い闇の中でも、宝珠の燈明の輝きで、十分に照射する働きを有しているから、光を放ったという意味である。じつに他ならぬ深い闇の中で燈明が光を放ったという意味である。王達が軍勢の先頭にいることから、ナラが転輪王であることが示唆されている。

「砂埃」(rajas) が「暗闇」(tamisra) をもたらす原因であり、「寒さ」や「黄色さ」をもたらすものではないことがわかる。以上の用例を考慮するならば、問題の詩節の nirjitārka という語は「太陽が持つ明るさという属性を消失させた」つまり「太陽の光を遮った」という意味に解釈できよう。

## 2.2.6 第 100 詩節

次の詩節も、大美文作品の詩節を参考にすることで、無理なく解釈することができる。

**jayodyame** tatra sahopayātā  
**premicitā** kāñcanamālikāsya |  
taṃ deśam abhyetya vinaṣṭanetraṃ  
dṛṣṭvaiva taṃ mohahatā papāta || 59.100 ||

[100] 〔タクシャシラーの都城を〕服従させようと彼が懸命になっていた時、彼の〔妻〕カーンチャナマーリカーはいつも寵愛を受けていたので、そこ (タクシャシラー) に〔クナーラと〕

一緒に来ていたのであるが、その場所に到着して、彼が眼を潰されたのを見るやいなや、気絶して倒れてしまった。

a 句冒頭部の解釈は容易ではない。前後の文脈からも、誰が何に対して「勝利しよう」と懸命になる」のかわからない。問題箇所をどのように解釈するかを考える上で、*Raghuvamśa* 第四章第53詩節が参考になろう。原文は次の通りである。

*Raghuvamśa* 4.53: tasyānīkair visarpadbhir **aparāntajayodyataiḥ** |  
rāmāstrotsārīto 'py āsīt sahyalagna ivārṇavaḥ ||

西方の国の者達に勝利しよう」と懸命になって近づいてくる彼(ラグ)の軍勢で、波はラーマが放つ矢で退けられていたにもかかわらず、すぐ近くに来ているかのように見えた。

b 句に対して Vallabhadeva 註(154.1)は *kaunḥkaṇānām abhibhavārthaṃ kṛtyodyogaiḥ* 「コーンカナ族の者達を征服するために努力する〔軍勢〕」と説明する。他方 Mallinātha 註(115.22–23)は *aparāntānām pāścātyānām jaya udyatair udyuktaiḥ* 「西方の国の者達に (*aparāntānām* = *pāścātyānām*) 勝利することに努める (*udyatair* = *udyuktaiḥ*)」と説明する。この二つの説明を参考にすると、*udyama* 「努力行為」の〈主体〉(*karṭṛ*)は b 句末の *asya* 「彼(クナーラ)」、*jaya* 「勝利行為」の〈目的〉は第59詩節の *purīm takṣaśilābhidhānām* 「タクシャシラーという名の都城」と考えて問題ないであろう。このように考えれば、問題箇所を *jayodyame sati* 「〔タクシャシラーの都城を〕服従させようと彼(クナーラが)懸命になっていた時」と解釈できよう。

b 句冒頭は「愛情を受けるにふさわしい」とも解釈可能である。確かに *ucita* という語は通常「x にふさわしい」(„entsprechend“) という意味で用いられる。しかしこの文脈では、直前の *sahopayātā* 「一緒にやってきていた」という語との意味的連関から考えて「x に慣れている」(„an Etwas gewohnt“) という意味が期待されよう。残念ながら PW が挙げる出典箇所は註釈からこの意味が支持されない。*ucita* という語が行為名詞以外の語を前分要素として複合語を形成し、かつ「x に慣れている」という意味を表示している用例を探すと、Bhāravi (西暦六世紀)の *Kirātārjunīya* 第一章第34詩節の用例がこれに該当する。原文を見よう。

*Kirātārjunīya* 1.34: paribhramaṃ **lohitacandanocitaḥ**  
padātir antargiri reṇurūṣitaḥ |  
mahārathaḥ satyadhanasya mānasam  
dunoti no kaccid ayaṃ vṛkodaraḥ ||

〔以前は〕赤い白檀粉を何度も塗って、大きな戦車に乗っていたけれども、〔今や〕両足を使って進み、土埃に塗れて、山の中を歩き回っているこのビーマが、真実だけを財産とする〔お前の〕心を決して苦しめることがないとよいが。

a 句の *lohitacandanocita* という語に対する Mallinātha 註(14.24–25)は次の通りである。*lohitacandanocita ucitalohitacandanaḥ | vāhitāgnyādiṣv iti sādhuḥ | abhyastaraktacandana ity arthaḥ | abhyaste 'py ucitaṃ nyāyāya iti yādavaḥ |* (「赤い白檀粉を何度も塗って (*lohitacandanocita* = *ucita-lohitacandanaḥ*)。Pāṇini 2.2.37: *vāhitāgnyādiṣu* にもとづいて正しい〔語形である〕。『繰り返し赤い白檀粉を塗って』という意味である。『*ucita* という語は *nyāyāya* 「適切な」という語と同義であり、*abhyasta* 「修習した」という意味も表示する。』と *Yādava* は言う。)。Citrabhānu 註(77.10)の説明は次の通りである。*ucitāśabdo 'bhyaste 'pi vartata iti lohitacandano 'bhyasta iti cārthaḥ sidhyati ||* (「*ucita* という語は『修習した』も意味するので、『赤い白檀粉が繰り返し塗られた』という意味も成り立つ。)。以上の用例を根拠に、第100詩節の *premocitā* という語は「いつも寵愛を受けていた」と解釈できよう。



## 2.2.7 第 127 詩節

Kṣemendra が活動した時期よりも後の時代に書かれた大美文作品も Av-klp の詩節を解釈する上で有益な手がかりを与える。

athāyayau śyāmalalakṣmalekhā-  
saṃdeśalīlālipisaṃniveśaḥ |  
kumudvatīharṣasuhṛt sitāṃśuḥ  
padmākaraśrīparihāralekhaḥ || 59.127 ||

127b °saṃniveśaḥ ] ABDZ (Ed.); °siṃniveśaḥ E.

[127] そして月が出た。月は伝言や戯れの〔ために書かれる〕文字のような一連なりの黒い斑点が入り込んでいる場所であり、蓮池の美しさを奪う光線を放つけれども、月待睡蓮の飲みの源でもあり友人でもあるのである。

ab 句に跨る長い複合語の解釈が難しい。まずこの複合語を構成する語の解釈を考えよう。śyāmalalakṣmalekhā という語は文字通り解釈すれば「黒い斑点の線」となろう。しかし「斑点の線」とは何か。これについては *Naiṣadhīyacarita* 第七章第 26 詩節が参考になる。原文は次の通りである。

*Naiṣadhīyacarita* 7.26: smāraṃ dhanur yad vidhunojjhitāsya  
yāsyena bhūtena ca lakṣmalekhā |  
etadbhruvau janma tad āpa yugmaṃ  
līlācalatvocitābālabhāvam ||

カーマの弓と彼女（ダマヤンティー）の顔になった月が捨てた一連なりの斑点という二つは、彼女の両眉という、色っぽさと動きとで人を喜ばせるあどけなさが感じられる誕生場所を得た。

b 句末の lakṣmalekhā という語に対して註釈者 Nārāyaṇa は kalaṅkarekhā 「一連なりの斑点」という語釈を与える (Nārāyaṇa on *Naiṣadhīyacarita* 7.26 [287.19])。これを考慮すれば、lekṣhā という語も、rekṣhā という語と同じく、複合語の後分要素として「一連なりの x」という意味を表示すると考えて問題ないであろう。次に複合語全体の意味解釈を考えよう。この複合語は saṃniveśa という語をどのように解釈するかによって少なくとも二通りに解釈可能である。

Pāṇini 3.3.19: akartari ca kārake saṃjñāyām に従い、saṃniveśa という語を「入り込む場所」という意味に解釈し、複合語全体を śyāmalalakṣmalekhāsaṃdeśalīlālipiḥ saṃniveśaḥ 「伝言や戯れの〔ために書かれる〕文字のような一連なりの黒い斑点が入り込んでいる場所」と分析される属格限定複合語に解釈するもの

Pāṇini 3.3.18: bhāve に従い、saṃniveśa を「入り込む行為」という意味に解釈し、複合語全体を śyāmalalakṣmalekhāsaṃdeśalīlālipiḥ saṃniveśo yasmin 「そこ(月)に伝言や戯れの〔ために書かれる〕文字のような一連なりの黒い斑点が入り込む所の〔月〕」と分析される処格所有複合語に解釈するもの

PW は saṃniveśa という語が〈場所〉(adhikaraṇa) の意味でも、〈行為〉(bhāva) の意味でも実作品で使用される用例を挙げる。しかし PW が後者の用例として挙げる出典箇所は註釈から支持されない<sup>21</sup>。問題の詩節では saṃniveśa という語を「入り込む場所」という意味に解釈するのが無難であ

<sup>21</sup>PW, s.v., *saṃniveśa* を参照せよ。PW は前者 („Ort der Verweilens, Aufenthaltsort“) の用例として *Raghuvaṃśa* 第 14 章第 76 詩節の用例を挙げる。これは相当箇所に対する Mallinātha 註 (434.15) の saṃniviśante yeṣv iti という語釈から支持される。しかし PW が挙げる後者 („Platzergreifung, Niederlassung“) の用例は註釈から支持されない。例えば *Rāmāyaṇa* 第五卷第一章第七詩節 (NSP 本では第四卷第 64 章第四詩節に相当する) の用例に対する Rāma 註は *saṃniveśam avasthitisthalaṃ cakruḥ* 「とどまる場所をつくった」であり、註釈家は〈場所〉の意味で解釈していることがわかる。

ろう。

### 2.2.8 第145詩節

カシミールの Jayasiṃha 王（西暦 1129–1150 年）の宮廷詩人 Mañkha は全 25 章からなる大美文作品 *Śrīkaṇṭhacarita* を著している。同作品で用いられる語句は PW 及び pw に採録されていないが、Richard SCHMIDT はこれを採録し、pw に対する補遺 (SCHMIDT, Nachtr) として発表している。Av-klp の詩節を解釈する上でこの補遺の参照を怠ることはできないが、この補遺に漏れている *Śrīkaṇṭhacarita* の語句も Av-klp 第 59 章の解釈に有益な視座を提供する。一例として第 145 詩節の原文を見よう。

sa labdhasaṃjñāḥ śanakair jalena  
himacchaṭāśīkaradantureṇa |  
samīpam āptaṃ nṛpatiḥ kumāram  
utsaṅgam āropya ciram śuśoca || 59.145 ||

**145b** °cchaṭāśīkaradantureṇa ] ABEDZ (Ed.); \*°cchaṭāśīkarasaurabhena Ex conj. DE JONG, Tib. has *zer ma'i thigs 'dra chus reg pas* (\*°cchaṭāśīkharasparśena).

[145] かの〔アショーカ〕王は雪の塊から滴る雫で眩い水を掛けられてようやく意識を取り戻し、近くにやって来た太子を膝に乗せ、長い間悲嘆に暮れた。

b 句末の *dantura* という語が「眩い」、「輝く」という意味を表示することについては山崎 [2015: 131] で示した。これを支持する用例をもう一例挙げておく。出典箇所は *Śrīkaṇṭhacarita* 第 15 章第 42 詩節である。その原文は次の通りである。

*Śrīkaṇṭhacarita* 15.42: *tāsām maṇḍalitāv akhaṇḍadayitāsleṣapraharsāt kucau  
rejāte jalajacchadāyatadrśām svedāmbuno bindubhiḥ |  
vyāvalganmadanānugatvararatiśrotrāgravegaskhalan-  
muktādanturahemakuṇḍalaliper ārūḍhavantau dhuram ||*

愛人に強く抱きしめられてとても喜んだので、蓮の花弁のように切れ長な眼をした彼女達の丸められた両乳房は汗の滴で輝いた。その両乳房は、戯れに歩き回るカーマの後を急いで追うラティの耳たぶから勢い余って落ちる真珠で眩い黄金の耳飾りのように見えた。

上掲詩節に対する Jonarāja 註は次の通りである。

Jonarāja on *Śrīkaṇṭhacarita* 15.42 (218.13–16): *akhaṇḍam nibiḍam dayitakarṭṛkād āśleṣān  
maṇḍalītau maṇḍalākārau sampannau tāsām kucau gharmajalasya kaṇaiḥ śuśubhāte | vyāvalgan  
krīḍāsaṃcārī yo madanas tasyānugatvary anuyāyini yā ratis tasyāḥ śrotrāgrād vegena skhalat patan  
muktādanturam yad dhemakuṇḍalam tasya lipeṣ ṭaṅkasya dhuram ārūḍhavantau | suvarṇakuṇḍala-  
sadrśāv ity arthaḥ |*

強くつまりすぎ間なく (*akhaṇḍam* = *nibiḍam*)、愛する夫を行為主体とする抱く行為で丸められたつまり丸い形になった (*maṇḍalītau* = *maṇḍalākārau sampannau*)、彼女達の両乳房は汗の滴で輝いた。あちこちへ移動するつまり戯れに歩き回ることを習慣とする (*vyāvalgan* = *krīḍāsaṃcārī*) カーマ神の後を急いで追う、すなわち追いかけるラティの耳たぶから勢い余って落ちた (*skhalat* = *patan*) 真珠で眩い黄金の耳飾りの外見 (*lipeṣ* = *ṭaṅkasya*) と等しい状態になった<sup>22</sup>。黄金の耳飾りと似た外見をとった〔両乳房〕という意味である。

<sup>22</sup>*dhū* という語が *sāmya* 「類似」という語の同義語として、動詞語根 *ā-ruh* が表示する「昇る」という行為の〈目的〉として用いられて「x のようになる」という意味を表示する用例については、*Śrīkaṇṭhacarita* 第 10 章第 43 詩節及び SCHMIDT, Nachtr, s.v., *dhurā* を参照せよ。

Jonarāja 註は muktādantura という語を別の語で言い換えていない。しかしこの用例でも、pw が挙げるすべての意味は文脈から考えて不適切である<sup>23</sup>。

### 2.2.9 第 117 詩節

ヒンドゥー教戯曲作品中の類似表現が詩節解釈に有益な視座を与える用例を見よう。第 117 詩節の解釈には Rājaśekhara (西暦 9–10 世紀) の戯曲作品の詩節が参考になる。

niḥsaṃśrayaḥ saṃśrayam ihamānaḥ  
sa hastiśālām nṛpater viveśa |  
**vīṇāvīnodā**darakautukena  
dattāvakāśaḥ karipālakena || 59.117 ||

117d karipālakena ] DZ; paripālakena ABE (Ed.), Tib. has *glang po skyong ba dag gis* (\*karipālakena).

[117] 彼は寄る辺なく、身を寄せる場所を求めて王の象の飼育場に入った。象の飼育人は<sup>24</sup>、〔彼が〕琵琶を奏でることに注意を寄せ興味関心を抱いて、彼に居場所を与えた。

pw が挙げる vinoda という語の意味は「放逐」(„Vertreibung“)、*「娯楽」*(„Unterhaltung“)、*「恋人の特定の抱擁」*(„eine best. Umschlingung Liebender“)である。SCHMIDT, Nachtr が挙げる意味も「楽しむ行為」(„Vergnügen“)、*「享楽」*(„Genuß“)のみである。しかしどの意味もこの文脈に適合しない。vinoda という語は動詞語根 vi-nud「演奏する」(„spielen“)に kṛt 接辞 GHaÑ が導入されて派生する語であるから、Pāṇini 3.3.18: bhāve に従い、「演奏行為」という意味を導くことは理論上可能であろう。事例についてはどうか。古典註を欠くものの、Rājaśekhara の *Bālarāmāyaṇa* 第四幕第八詩節に類例がある。

*Bālarāmāyaṇa* 4.8: he hemavarṇa maṇiśekhara citrabāho  
**vīṇāvīnoda** madavallabha raktakaṇṭha |  
krīḍākumāra kanakāṅgada rudrahāsa  
drāk sārāṇaḥ sarata mām yudhi ced didṛkṣā ||

おお黄金色の肌をした者よ、宝珠を冠に戴く者よ、素晴らしい腕をした者よ、琵琶を奏でる者よ、情欲を友とする者よ、赤い喉をした者よ、戯れのための童子よ、黄金の腕輪をはめた者よ、ルドラハーサよ、シッダ達よ、もしお前達が〔ブリグの子孫とラーヴァナ達との戦いを〕見ようと思うなら、お前達は戦場で速やかに私の後を追え。

以上の用例では、呼び掛け (sambodhana) を意味する感嘆詞 he を除いて、abc 句を構成するすべての語がルドラハーサの添え名となっている。したがって Rājaśekhara は vinoda という語を「演奏行為」という意味に解釈し、vīṇāvīnoda という複合語を vīṇāyā vinodo yasya「琵琶を演奏する者」と分析される属格所有複合語として用いていることが理解されよう。以上の用例を根拠に vinoda という語を「演奏行為」という意味に解釈することは可能であろう。

<sup>23</sup> dantura という語が表示する意味として pw が挙げるのは以下の四つである。「歯が突き出ている」(„her-vorstehende Zähne habend“)、*「起伏がある」*(„uneben“)、*「びっしりと覆われている」*(„dicht besetzt mit“)、*「醜い」*(„häßlich“)。

<sup>24</sup> 梵文写本の読みは paripālakena であり、校訂本はこの読みをとる。しかしこれでは意味が通じない。梵文音写は karipālakena という読みを伝え、対応する Tib. *glang po skyong ba dag gis* はこれを支持する。したがって karipālakena という読みを採用する。

## 2.2.10 第121詩節及び第128詩節

第121詩節と第128詩節の解釈には Bhavabhūti の戯曲作品の詩節が参考になる。前者の原文を見よう。

\*nṛtyanti te tava puraḥ śikhino ghanāśā-  
lolāḥ paraṃ karipativrajarjitena |  
**kaumārabarhikulāsambhava eṣa barhī**  
garjatksaṇe **gaṇapater** api nirvikāraḥ || 59.121 ||

**121a** \*nṛtyanti te ] Ex conj. DE JONG; nṛtyanti ye ABEDZ (Ed.). **121c** kaumāra° ] A<sup>pc</sup>BEDZ (Ed.); kaumāva° A<sup>ac</sup>.

[121] 象の王達の群れが嘶いたので、そこにいる孔雀達は貴方の前で雨雲を待ちわびてせわしなく動き回って舞を舞っています。この孔雀は軍神スカンダを乗せる孔雀の家系に生まれたので、ガネーシャが嘶く瞬間にも動じることはないのです。

cd 句をどのように解釈するかにあたって、Bhavabhūti の *Mālatīmādhava* の冒頭の詩節が参考になる。その原文を見よう。

*Mālatīmādhava* 1.2: sānandaṃ nandihastāhatamurajaravāhūta**kaumārabarhi-**  
trāsān nāsāgrarandhraṃ viśati phaṇipatau bhogasamkocabhāji |  
gaṇdoḍḍīnālīmālāmukharitakakubhas tāṇḍave śūlapāṇer  
**vaināyakyas** ciraṃ vo vadanavidhutayaḥ pāntu cītkāravatyah ||

矛を手にした者(シヴァ)が舞う時、ナンディンの手で叩かれる太鼓の音で呼び寄せられたスカンダを乗せる孔雀を恐れて<sup>25</sup>、〔ガネーシャの小さな鼻の穴に入ろうとして〕体を縮めることに懸命になる蛇の主(シェーシャ)が、鼻先の穴へと喜んで入って行く時、恐ろしい音を立て、また〔マダ液が流れ出る〕頬から飛び立つ蜂の群れに四方に音を拡散させているガネーシャの顔の震えが貴方様を長い間清めんことを。

第121詩節 d 句の gaṇapati という語を単純に解釈すれば「群れの主」という意味に解釈できよう。しかし c 句で用いられている kaumārabarhi「軍神スカンダを乗せる孔雀」という語が *Mālatīmādhava* 第一幕第二詩節 a 句にも見られ、かつ vaināyaki「ガネーシャ神の」という語と一緒に用いられていることに注意すべきである。この事実を照らし、問題の詩節の gaṇapati という語は「群れの主」といった漠然とした意味ではなく、名称語 (samjñā) として「ガナパティ」つまり「ガネーシャ神」という意味で解釈すべきであろう。

第128詩節を見よう。原文は次の通りである。

apūrayat kāntisitāmśukena  
śuciḥ **sudhāmsur** yaśaseva viśvam |

<sup>25</sup>kaumārabarhi という語の解釈をめぐる註釈家 Tripurāri と Jagaddhara は解釈を異にする。前者は Pāṇini 4.3.120: tasyedam を前提にして kaumāra (「スカンダに属する」という語を説明し、skandavāhanamayūrāt 「スカンダ神の乗り物である孔雀」(Tripurāri on *Mālatīmādhava* 1.2 [3.23–24])、すなわち kaumāras cāsau barhī ca と分析される同格限定複合語に解釈する。これに対し後者は kumāra という語の後に導入される taddhita 接辞 aṅ が意味ゼロ (svārtha) であると考え、kārttikeyamayūra 「カールティケーヤ(スカンダ)の孔雀」(Jagaddhara on *Mālatīmādhava* 1.2 [2.20])、すなわち kaumārasya barhī と分析される属格限定複合語に解釈する。kumāra という語は、taddhita 接辞 aṅ が意味ゼロで規定される Pāṇini 4.3.120: prajñādibhyaś ca という文法規則が適用される prajña 群 (Gaṇapātha 150) にリストアップされていないが、Jagaddhara は同群を ākṛtigāṇa と見なしこの規則を適用しているようである。パーニニ文法学にもとづくこの語義解釈の説明については川村悠人氏、友成有紀氏の御教示に負う。

dugdhatviṣā **mugdhamṛṇālavallī-**  
**navāṅkurākāramayūkhalekhaḥ** || 59.128 ||

**128d** °navāṅkura° ] ABE; °navākura° DZ; \*°navāṅkara° Ex conj. Ed. || °mayūkha° ] ABDZ (Ed.); °mayūra° E.

[128] 蓮の茎に巻きつく蔓草の新芽のような形をしていて、光線を放つ白い三日月は、名声〔ですべてのものを覆うか〕のように、乳のような色をした輝きという白い衣ですべてのものを覆った。

cd 句に跨る複合語については複数の解釈が可能である。厄介なのは *mugdha* 「若い」という語である。確かにこれを後続する *mṛṇāla* 「蓮の茎」という語の限定要素と解釈することは可能である。しかしこの解釈をとると、「いまだ成長していない蓮の茎に巻きつく蔓草」という奇妙な意味になる。別解釈を考えるべきであろう。*mugdha* という語が b 句の *sudhāṃśu* 「月」という語を限定しているという解釈を考えてみる。この解釈は実作品の用例に裏づけられるか。これについては次の用例が参考になる。

*Mālatīmādhava* 9.21: *bandhutāhṛdayakaumudīmaho*  
*mālatīnayanamugdhacandramāḥ* |  
 so 'yam adya makarandanandano  
 jīvalokatilakaḥ pralīyate ||

親族一同の心にとって月光がもたらす祭り騒ぎであり、マーラティーの両眼にとって三日月であり、マカラダの歓びの源であり、生きとし生ける者達の世界の飾りであるこの彼は今や死んでしまったのだ。

Harihara 註 (313.19–20) は *bandhusamūhasya hṛdaye kaumudīmahotsavaḥ mālatīnayanane ca prati mugdho bālaś candramāḥ* (「親族一同の心に対しては月光がもたらす大きな祭り騒ぎであり<sup>26</sup>、マーラティーの眼に対しては若い (*mugdho* = *bālaś*) 月である」という語釈を与える。以上の用例は *mugdha* という語が *bāla* という語と同じ意味を表示し、「月」を意味する語の限定要素として使用されていたことを示唆しよう。これを根拠に *mugdha* という語を *sudhāṃśu* という語の限定要素と解釈することは可能であろう。以上を踏まえれば、*mṛṇālavallīnavāṅkurākāra* と *mayūkhalekha* という複合語をそれぞれ *mṛṇālavallīnavāṅkurasākāra ivākāro yasya* 「蓮の茎に巻きつく蔓草の新芽の形のような形をした」、*mayūkhāṇam lekhaḥ yasya* 「光の線を放つ」と分析される属格所有複合語に解釈し、全体を *mugdha* と *mṛṇālavallīnavāṅkurākāra*、*mayūkhalekha* という三つの限定要素からなる、*sudhāṃśu* 「月」の同格限定複合語と解釈できよう。

以上から、Av-klp の原典校訂と詩節解釈にあたっては、その多くの箇所、仏教美文作品よりもヒンドゥー教美文作品が有益な状況証拠を提供することがわかる。確かに我々のもとに残されている仏教美文作品は、実際に書かれた作品のうちのごく一部であるということには注意しなければならない。しかし *Bhavabhūti* や *Mañkha* といった、*Kṣemendra* の活動年代の前後にカシミールで活動した詩人の作品に語や表現をめぐって類例が存在することは看過できないであろう。とりわけ前者は *Kṣemendra* の詩論書 *Aucityavicāracarcā* に頻繁に引用されている。この事実は *Kṣemendra* が *Bhavabhūti* らヒンドゥー教美文詩人達を意識し、彼等の作品を参照しながら Av-klp を著していたことを示唆すると言えよう。

<sup>26</sup>COULSON [1981: 401] は a 句を「彼の家族の誇り」(“The pride of his family”)と解釈する。簡明さを考慮した末に、このような訳に行き着いたのかも知れないが、同じく一般読者向けに翻訳された FRITZE [1884: 105] の「親族と友人達にとっての盛大な月の祭り騒ぎであった」 („das große Mondesfest den Anverwandten und den Freunden war“) という訳が原文に忠実と言えらる。

### 3 結論

以上の考察結果は次のように要約できよう。

- Kṣemendra がそれぞれ第27詩節と第28詩節で用いる〈掛詞による直喩〉と〈直喩〉は詩論家の定義に従って構成されていない。前者は比喩基準にあたる語と比喩対象にあたる語とを限定しなければならない語が比喩対象にあたる語のみを限定している点で、後者は比喩基準にあたる語と比喩対象にあたる語が性の点で一致しない点で、詩論家が定める規則に反する。
- Bhavabhūti は *Mālatīmādhava* 第九幕第10詩節で比喩基準にあたる語と比喩対象にあたる語とが数の点で一致しない〈直喩〉を用いている。興味深いことに、註釈家 Jagaddhara はこの数の不一致を、〈情〉により認知されないということを理由に、〈欠陥〉と見なしていない。
- 第25詩節と第27–28詩節とにそれぞれ見出される moha「迷い」と kampa「震え」、bhīti「恐れ」という語は、Dhanamjaya の演劇論によると、それぞれ〈恐怖〉の〈情〉の〈付随的感情〉と〈感情表現〉、〈基本的感情〉を表現するのに用いられる語である。
- Kṣemendra が用いる語・表現の圧倒的多数は、Bhavabhūti や Mañkha といったヒンドゥー教詩人達の美文作品に見られる。Kṣemendra が用いているものと同じ語・表現をヒンドゥー教詩人達が用いている用例を検討することで、Av-klp の原典を復元することが可能となるだけでなく、原典を正確に解釈することも可能になる。

以上を考慮に入れると、我々は次のような結論に行き着く。(1) Kṣemendra は〈情〉を喚起させることを、詩論家が定める規則に従って〈飾り〉を構成することよりも重んじる著作姿勢をとっていた。(2) 彼はまた、仏教美文作品の伝統よりもむしろ、ヒンドゥー教美文作品の伝統に強く依拠していた。このことは彼の詩論書に仏教詩人の作品から詩節引用がないという事実からも裏づけられる。

Av-klp に収録されている物語の材源を解明するために、その内容を聖典資料に伝承される並行話のそれと比較検討する作業は不可欠である。この前提となるのは Av-klp の正確な原典校訂と解釈である。原典校訂にあたり、〈飾り〉の理論にもとづき、著しく原形を損なっている原文を推定し復元することは方法論として有効であろう。しかしそれは、Kṣemendra の著作姿勢を考慮に入れ文脈に注意しながら、行われねばならない。また Av-klp で使用される語や表現は時として難解である。これらを憶測に頼らず正しく解釈するために、ヒンドゥー教美文作品の類例の参照を怠ることはできない。多くの場合、ヒンドゥー教美文作品には註釈が残されている。この註釈にもとづいて問題となる語や表現の意味を我々は理解することができる。註釈家の解釈が原著者の意図をつねに反映しているとは限らないが、註釈が原著者の時代に遡る解釈を含んでいることもまた事実である。Av-klp の校訂・翻訳研究は STRAUBE [2006, 2009]、ASPLUND [2013] を始めとして本邦の研究者によっても発表されている。しかし以上に指摘した点は看過されている。Av-klp の校訂・翻訳研究を我々がチベット大蔵経や漢訳経典との比較検討のもとになさねばならないことは言うまでもないが、ヒンドゥー教美文作品や詩論書を思想的関連性がないという理由で視野の外に置くのではなく、等しく検討の範囲に入れる必要がある。

#### 参考文献

##### (1) 一次文献

- Amarakośa The Nāmaliṅgānuśāsana (Amarakosha) of Amarasinha: With the Commentary (Vyākhyāsudhā or Rāmāśramī) of Bhānuji Dīkshī.* Ed. Paṇḍit ŚIVADATTA. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1889. Reprint: Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, 1984.
- Aṣṭādhyāyī Aṣṭādhyāyī of Pāṇini.* Ed. and Trans. Sumitra Mangesh KATRE. Delhi: Motilal Banarsidass, 1989.

- Avadānakalpalatā Avadāna kalpalatā: A Collection of Legendary Stories about the Bodhisattvas by Kṣemendra. With Its Tibetan Version Called rTogs brjod dpag bsam 'khri shing by Shongton lochāva and Paṇḍita Lakṣmīkara. Now First Edited from a Xylograph of Lhasa and Sanskrit Manuscripts of Nepal.* Ed. Sarat Chandra DĀS, Hari Mohan VIDYĀBHUṢAṆA, and Satis Chandra VIDYĀBHUṢAṆA. Bibliotheca Indica New Series Nos. 777, 826, 848, 860, 886, 1168, 1257, 1262, 1295, 1310, 1354. 2 vols. Calcutta: Baptist Mission Press, 1888–1918.  
See HAHN [1997].
- Bālarāmāyaṇa The Bālarāmāyaṇa: A Drama by Rājasekhara.* Ed. Pandit Govinda Deva ŚĀSTRĪ. Benares: Medical Hall Press, 1869.
- Daśarūpa The Daśa-rūpa, or Hindu Canons of Dramaturgy, by Dhananjaya with the Exposition of Dhanika, the Avaloka.* Ed. Fitz-Edward HALL. Bibliotheca Indica New Series Nos. 12, 24, and 82. Calcutta: Baptist Mission Press, 1861.
- Gopadattajātakamālā* See HANDURUKANDE [1984] and HAHN [1992].
- Haravijaya The Haravijaya of Rājanaka Ratnākara: With the Commentary of Rājānaka Alaka.* Kāvya-mālā 22. Ed. Paṇḍit DURGĀPRASĀD and Kāśīnāth Pāṇḍurang PARAB. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1890.
- Kāvya-lamkāra The Kāvya-lankāra (A Treatise of Rhetoric) of Rudrata with the Commentary of Namisādhu.* Kāvya-mālā 2. Ed. Paṇḍit DURGĀPRASĀD and Kāśīnāth Pāṇḍurang PARAB. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1886.
- Kirātārjunīya The Kirātārjunīya of Bhāravi: With the Commentary Sabdārthadīpikā of Chitrabhānu.* Ed. Taruvāgrahāram GAṆAPATISĀSTRĪ. Anantaśayanasamskṛtagranthāvaliḥ 63. Trivandrum: Government Press, 1918.  
*Kirātārjunīya of Bhāravi with the Commentary (the Ghaṇṭāpatha) of Mallinātha.* Ed. Paṇḍit DURGĀPRASĀD and Kāśīnāth Pāṇḍurang PARAB. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1907.
- Mālatīmādhava Hariharaviracitā mālatīmādhavaṅkā: Le commentaire de Harihara sur le Mālatīmādhava de Bhavabhūti.* Ed. François GRIMAL. Publications du Département d'Indologie 77. Pondichéry: Institut français de Pondichéry, 1999.  
*Mālatī-Mādhava of Bhavabhūti: With the Commentary of Jagaddhara.* Ed. Ramkrishna Gopal BHANDARKAR. Bombay: Government Central Book Depôt, 1905. Reprint: Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1970.  
*The Mālatīmādhava of Bhavabhūti: With the Commentaries of Tripurāri and Jagaddhara.* Ed. Mangesh Rāmkrishṇa TELANG. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1892.
- Manusmṛti Manusmṛti: With the 'Manubhāṣya' of Medhātithi.* Ed. Gaṅgānātha JHĀ. 3 vols. Calcutta: Royal Asiatic Society of Bengal, 1932–1939.
- Meghadūta Kālidāsa's Meghadūta: Edited from Manuscripts with the Commentary of Vallabhadeva and Provided with a Complete Sanskrit-English Vocabulary.* Ed. Eugen HULTZCH. London: Royal Asiatic Society, 1911.  
*Mahākavikālidāsaviracitaṃ Meghadūtam: Mallināthapraṇītasamjvīnīvyākhyayā, ṭippaṇī-pāṭhāntara-pari-śiṣṭādibhiḥ ca sanāthīkṛtam.* Ed. Nārāyaṇa Rāma ĀCĀRYA. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1953.
- Naishadhīyacarita Śrīharsha's Naishadhīyacharita: With the Commentary (Naishadhīyaparakāśa) of Nārāyaṇa.* Ed. Pandit ŚIVADATTA. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1894.
- Raghuvamśa The Raghuvamśa of Kālidāsa: With the Commentary of Mallinātha.* Ed. Shankar P. PANDIT. 3 vols. Bombay Sanskrit Series No. 5, 8, 13. Bombay: Indu-Prakash Press, 1869–1874.  
See GOODALL and ISAACSON [2003].
- Rāmāyaṇa The Rāmāyaṇa of Vālmīki: With the Commentary (Tilaka) of Rāma.* Ed. Wāsudev Laxman Śāstrī PAṆŚĪKAR. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1930.
- Saundarananda* See JOHNSTON [1928] and COVILL [2007].
- Śīsupālavadhā The Śīsupālavadhā of Māgha: With the Commentary (Sarvankashā) of Mallinātha.* Ed. Paṇḍit DURGĀPRASĀD and Paṇḍit ŚIVADATTA. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press 1910.
- Śrīkaṇṭhacarita The Śrīkaṇṭhacarita of Mankhaka: With the Commentary of Jonarāja.* Ed. Paṇḍit DURGĀPRASĀD and Kāśīnāth Pāṇḍurang PARAB. Kāvya-mālā 3. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1887.

## (2) 二次文献

- ASPLUND, Leif. 2013. *The Textual History of Kavikumārāvadāna: The Relations between the Main Texts, Editions and Translations.* Stockholm: Department of Oriental Languages, Indology Stockholm University.
- BENDALL, Cecil. 1883. *Catalogue of the Buddhist Sanskrit Manuscripts in the University Library Cambridge: With Introductory Notices and Illustrations of the Palaeography and Chronology of Nepal and Bengal.* Cambridge: The University Press.
- COULSON, Michael, trans. 1981. *Three Sanskrit Plays.* Penguin Classics. Harmondsworth: Penguin Books.
- COVILL, Linda Constance, trans. 2007. *Handsome Nanda by Aśvaghōṣa.* Clay Sanskrit Library. New York: New York University Press.

- DE JONG, Jan Willem. 1977. "The *Bodhisattvāvadānakalpalatā* and the *Śaddantāvadāna*." In *Buddhist Thought and Asian Civilization: Essays in Honor of Herbert V. Guenther on His Sixtieth Birthday*, ed. Leslie S. KAWAMURA and Keith SCOTT. 27–38. Emeryville, California: Dharma Publishing.
- . 1979. *Textcritical Remarks on the Bodhisattvāvadānakalpalatā Pallavas 42–108*. Studia Philologica Buddhica Monograph Series II. Tokyo: Reiyukai Library.
- DIETZ, Siglinde. 2002. "Fragments of the \*Andhasūtra, of the Sūtra on the Three Moral Defects of Devadatta, and of the Kavikumarāvādāna\*." In *Buddhist Manuscripts*, ed. Jens BRAARVIG et. al., 2:25–36. Manuscripts in the Schøyen Collection III. Oslo: Hermes Publishing.
- FRITZE, Ludwig, trans. 1884. *Mālatī und Mādhava: Ein indisches Drama von Bhavabhūti*. Leipzig: Philipp Reclams Universal-Bibliothek.
- GOODALL, Dominic, and Harunaga ISAACSON. 2003. *The Raghupāñcikā of Vallabhadeva: Being the Earliest Commentary on the Raghuvamśa of Kālidāsa*. Vol. 1. Groningen: Egbert Forsten.
- HAAS, George Christian Otto. 1912. *The Daśarūpa: A Treatise on Hindu Dramaturgy by Dhanamjaya*. Columbia University Indo-Iranian Series Vol. 7. New York: Columbia University Press. Reprint: New York: AMS Press, 1965.
- HAHN, Michael. 1992. *Haribhaṭṭa and Gopadatta: Two Authors in the Succession of Āryaśūra: On the Rediscovery of Parts of Their Jātakamālās*. Studia Philologica Buddhica Occasional Paper Series I. Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.
- . 1993. "Notes on Buddhist Sanskrit Literature: Chronology and Related Topics." In *Studies in Original Buddhism and Mahāyāna Buddhism: In Commemoration of Late Professor Dr. Fumimaro Watanabe*, ed. Egaku MAYEDA. 31–58. Kyoto: Nagata Bunshodo.
- . 1997. "Kṣemendras *Garbhāvākṛāntyavadāna* (Sanskrittexte aus dem tibetischen Tanjur II)." *Journal of the European Āyurvedic Society* 5:82–112.
- HANDURUKANDE, Ratna. 1984. *Five Buddhist Legends in Campū Style: From a Collection Named Avadānasāra-samuccaya*. Indica et Tibetica Band 4. Bonn: Indica et Tibetica Verlag.
- JOHNSTON, Edward Hamilton. 1928. *The Saundarananda of Aśvaghōṣa*. Lahore: Oxford University Press.
- KRITZER, Robert. 2014. *Garbhāvākṛāntisūtra: The Sūtra on Entry into the Womb*. Studia Philologica Buddhica Monograph Series XXXI. Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.
- LANGENBERG, Amy Paris. 2015. "Kṣemendra's *Garbhāvākṛāntyavadāna* through a Tibetan Looking-Glass." In *In Vimalakīrti's House: A Festschrift in Honor of Robert A. F. Thurman on the Occasion of His 70th Birthday*, ed. Christian K. WEDEMEYER, John D. DUNNE, and Thomas F. YARNALL. 119–130. New York: American Institute of Buddhist Studies.
- SPEYER, Jacob Samuel. 1906–1909. *Avadānaçataka: A Century of Edifying Tales Belonging to the Hīnayāna*. Bibliotheca Buddhica III. 2 vols. St. Petersburg: Académie impériale des sciences.
- STRAUBE, Martin. 2006. *Prinz Sudhana und die Kinnarī: Eine buddhistische Liebesgeschichte von Kṣemendra Texte, Übersetzung, Studie*. Indica et Tibetica 46. Marburg: Indica et Tibetica Verlag.
- . 2009. *Studien zur Bodhisattvāvadānakalpalatā: Texte und Quellen der Parallelen zu Haribhaṭṭas Jātakamālā*. Veröffentlichungen der Helmuth von Glasenapp-Stiftung Monographien 1. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- 引田 弘道 2006 「クナーラ物語 (その一)」『人間文化』21:159–185.
- 2007 「クナーラ物語 (その二)」『人間文化』22:173–190.
- 山崎 一穂 2011 「クシェーメンドラ本「クナーラ・アヴァダーナ」の源泉資料について」『比較論理学研究』8:63–166.
- 2014 「*Avadānakalpalatā* におけるクシェーメンドラの著作姿勢について——「ヴァーサヴァダターの教化」を中心に——」『比較論理学研究』11:75–106.
- 2015 「サンスクリット美文詩と賛歌——Bhāravi 作 *Kirātārjunīya* 第 18 章第 22–43 詩節を中心に——」『比較論理学研究』12:97–133.
- 2016 「Gopadatta の仏教美文作品における〈直喩〉について」『東洋学研究』53:362–376.
- 2017a 「クシェーメンドラ本「大地の布施物語」和訳研究」『東洋学研究』54:377–388.
- 2017b 「マートリチェータの仏讃に見られる比喩表現について」『哲学』69:15–28.



Notes on the Fifty-Ninth Chapter of the *Avadānakalpalatā*

Kazuho Yamasaki

The *Avadānakalpalatā*, by the Kashmiri poet Kṣemendra (ca. 990–1066 CE), is a collection of Buddhist legends in one hundred and eight chapters. The fifty-ninth chapter of the work is devoted to the legend of Prince Kuṇāla, the son of King Aśoka. Kṣemendra bases his version of the legend of Kuṇāla on the *Ku na la'i rtogs pa brjod pa* (\**Kuṇālāvadāna*), available to us in its entirety in Tibetan ('*Dul ba*, Peking, SU227b3–240a4). A glimpse at Kṣemendra's version tells us that the poet takes pains to introduce into his version elements typical of court poetry, for example, the description of spring (vv. 18–21), of women (vv. 65–68), of a sunset (v. 122), of the rising of the moon (vv. 127–128), etc. However, scholars have paid little attention to Kṣemendra's use of poetic elements. Focusing on the text of the fifty-ninth chapter of the *Avadānakalpalatā*, I consider the question of Kṣemendra's attitude towards poetry, and the poetic traditions upon which he has drawn. A perusal of the text reveals the following:

- According to poetics, a simile (*upamā*) must be constructed so that the standard of comparison (*upamāṇa*) could agree in gender, number, and case with the subject of comparison (*upameya*). In verse 28, Kṣemendra uses a simile in which the standard of comparison does not agree in gender with the subject of comparison, as in *bhūtyeva śīlena vimucyamānā* (“Just as one is free from **fear**, similarly she was free from **morality**.”).
- In *Mālatīmādhava* 9.10, Bhavabhūti (eighth century CE) employs a simile in which the standard of comparison does not agree in number with the subject of comparison, as in *trṇam iva tataḥ prāṇān moktum mano vidhṛtaṃ tayā* (“Just as one resolves to give up **a blade of grass**, similarly she then resolved to give up her **life**.”). It is interesting to note that Jagaddhara (ca. thirteenth to fourteenth century CE), one of the commentators on the *Mālatīmādhava*, advances the view that the simile in question cannot be regarded as defective, for the defect of disagreement in number is here acceptable because of poetic sentiment (*rasa*).
- In verses 25, 27, and 28, one can find the words *prakampa* (“tremor”), *moha* (“delusion”), and *bhūti* (“fear”), respectively, which are, according to the dramaturge Dhanaṃjaya (late tenth century CE), used to describe the symptom (*anubhāva*), the transient state of mind (*vyabhicārin*), and the basic emotion (*sthāyibhāva*) of a terrifying sentiment (*bhayānakarasa*), respectively.
- A large number of poetic phrases employed by Kṣemendra can be exclusively found in the works of non-Buddhist poets, such as Bhavabhūti, Mañkha (twelfth century CE), and others. A closer investigation of the examples in which non-Buddhist poets use poetic phrases similar to Kṣemendra's makes it possible for us not only to tentatively reconstruct the original text of the *Avadānakalpalatā*, but to more accurately interpret the same text.

In conclusion: (1) Kṣemendra gives priority to the suggestion of sentiment over the construction of ornaments of speech within the confines of rules laid down by poetics; (2) He drew more heavily on the tradition of Hindu court poetry than that of Buddhist court poetry, which he does not quote at all in his treatise on poetry.